自由時間

VOL.12

「わが涙滂々」現地探訪ツアー　原　和美
―　福島県葛尾村（避難指示解除準備地区）訪問記　―

六千人の命のビザ　吉澤エミ
―杉原千畝をたどる旅より―

短　歌　草場弘子

からゆきさんの声が聞こえる　田島すみ子
―秋元松代の戯曲から―

故郷の小学校が、閉校になった　町田　輝子
―少子化の流れの中で―

女たちの〈解放〉への欲求をくみ上げた「国防婦人会」
―市井の女たちの戦争協力―（講演記録）
女性史・ジェンダー史研究者　加納実紀代

・・農園便り「ケヤキ農園あれこれ」・・町田輝子

自由時間

NO. 12

「わが涙滂々（ぼうぼう）」現地探訪ツアー

― 福島県葛尾村（避難指示解除準備地区）訪問記 ―

原　和美

草茫々
田畑茫々
村一つ荒れ果てて茫々

（中略）

かつての昔
子たち孫たちの歓声はね返り
バーベキューの焚き火燃え盛った
その庭に
生きて暮らした思い出消えやらぬ

その庭に

草茫々
ふるさと亡々
わが涙滂々

草茫々
何もかも亡々
悔し涙滂々

（小島力「一年四か月目の一時帰宅・草茫々」より）

二〇一四年三月八、九日の両日、私は福島県葛尾村を訪ねる「わが涙滂々」探訪ツアーに参加した。「わが涙滂々」というのは、詩人小島力（こじまちから）さんの詩集の題名である。小島さんは一九三五年生まれの七九歳。二〇一一年三月十二日、福島第一原子力発電所の一号機が水素爆発を起こした際に自宅を出て、長い避難生活に入った。小島さんのお宅は、福島第一原子力発電所から山一つ隔てた葛尾村の山あいにある。現在は武蔵野市の都営住宅で奥さんとふたりで仮住まいをしていらっしゃるが、今回のツアーは、小島さんのご自宅周辺、つまり葛尾村を訪ね、詩の舞台を知るとともに、まだ全村避難が続いている葛尾村の現状を肌身で感得しようという企画である。

仕掛け人は小島さんの娘さんの坂口さんだ。子育て真っ最中、仕事あり、その上音楽サークルの重要メンバーでもあるらしい才気煥発な坂口さんが、友人に声をかけたのが始まりだったようだが、五十人定員のつもりが、あれよあれよと人が集まり結局六二人の大所帯となった。ツアー二日目には、東京新聞の記者も同行取材に入るとのこと。主催者の予想を上回る反響は、やはり詩集の力によるものだろうか。私も友人に誘われた時、「詩人本人も同行される」との言葉に一も二もなく参加を決めた口である。

■「原発のない福島を！県民大集会」

さて、三月八日、葛尾村訪問に先立ち、同日福島の三会場で開かれた「原発のない福島を！県民大集会」にも参加することにして、私と友人は意気揚々と新幹線で郡山まで向かった。が、現地で私たちを待ち受けていたのは霏々と降り止まぬ雪だった。駅前から会場に続く大通りも建物も、十センチほどの雪に白く覆われている。タクシーを乗り合わせて到着したメイン会場「ユラックス熱海」のホール入り口は、雪を払う人、短靴でおそるおそる歩を進める人などでごった返していた。

「県民大集会」では、作家大江健三郎氏の講演の後、様々な立場の人たちが、今の「フクシマ」について語った。原子力資料室の研究者、強制避難させられた人、自主避難した人、有機農業を実践してきた人、低賃金で除染作業に従事する人、そして福島に住む高校生など、数にすれば六人ほどの発言なのに、どの訴えも耳を疑うほど厳しい。観光半分でやってきた私の「東京ボケ」は早々に消し飛んだ。原発事故から三年を経て福島は復興へ向っていると思っていたのは、身勝手な幻想

にすぎなかった。現実の福島は三年経ったことで一層問題が広範囲に波及し、より複雑な様相を呈してきている。そもそも未だに避難者が十四万人、そのうち五万人が県外避難を続けているということ自体が、すでに事故後三年目の深刻さを物語っているのではないか。高齢者が多ければ、環境が変わることのダメージは心身ともに大きい。災害関連死も一六〇〇人以上、すでに津波の犠牲者数を上回ったと聞いて、私は唸ってしまった。

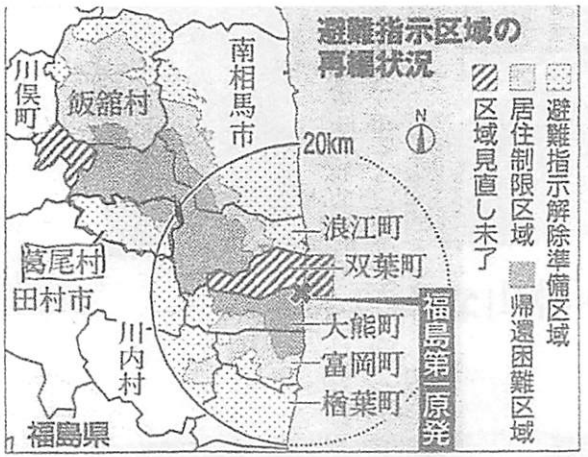
「事故が起こった今、国や東電に責任をとれと大人たちは言うけれど、もしそんな大人たちが原発に反対してきたならば、こんなことにならなかったはず。責任を取らなければならないのは、原発に無関心だった大人たちだと思う。」と高校生の代表として壇上に立った女子生徒の声が耳に刺さる。「あの時福島にいたというただそれだけのことで『被爆者』とレッテルを貼られて生きていかなくてはならなくなった」との彼女の訴えに、どうしたら解を見つけることができるのだろうか。

■葛尾村の人々との夜

三時に集会が終わり、いよいよ会場からバスに乗って、詩集の舞台をめぐる旅がスタートした。詩人小島さんも同乗しておられる。集会会場の磐梯熱海から当夜の宿泊地三春町「馬場の湯温泉」に向う途中で、あんなに積もっていた雪が視界から消えた。坂口さんによれば、会津から磐梯熱海あたりまでが山の気候で、県中央の「中通り」と呼ばれる地域、「浜通り」と呼ばれる太平洋沿岸地域へと下るにしたがって、降雪量は少なくなるそうだ。気象もまた「福島」と一括りにできないのだと新鮮な驚きを覚える。車窓から見ると、遠くの山々にはまだ尾根伝いに雪が残り、それが傾い

た早春の陽に映えて、なんとも美しい。バスが曲がるたびに風景が変わる。…見とれているうちにその日の宿に到着した。

その晩、葛尾村の人々との交流会が持たれた。会場には福島の海の幸、山の幸がいく皿も並んで、正直、少額な参加費とは不釣り合いな豪華な膳だ。もちろんおなかはグーと鳴る。坂口さんや旅行会社の並々ならぬ心意気があってのことだろう。申し訳ないような気持ちだが、感謝していただいた。



葛尾村と福島第 1 原子力発電所（避難指示区域の見直しを伝える記事より/2013 年 3 月 22 日付朝日新聞）

小島さんの詩の朗読から始まった交流会は、葛尾村の人たちが次々にマイクを回して自己紹介や避難生活のこと、これからのことなどを語る形で進行した。テレビはもちろん、新聞にも雑誌にも福島については報道されてきたし、今もされている。が、そうした膨大な情報に接しても、ニュース映像に目を凝らしていても、決して見えてこない、聞こえてこない現地の人の生の生活と声を、私はこの交流会で初めてキャッチできた気がした。

たとえばMさん。Mさんは畜産農家で十八頭の牛を飼っていたが、結局、今回の「原発災害」で全

頭処分しなければならなくなった。このMさんの話を紹介する前に、まず葛尾村が三・一一以後どういう経緯をたどったかを簡単に記しておいた方がいいだろう。

葛尾村は福島第一原子力発電所から西北西に二〇～三〇キロ圏にほぼ収まる小さな村だ。震災前の人口は約一五〇〇人。信号のある交差点は村内で一か所のみ。阿武隈高原の山あいに位置し、山の斜面を生かして牛を飼う農家が多かった。牛が草を食むのどかな村の光景は、しかし二〇一一年三月一一日以後の連続した原発事故によって一変した。

津波の衝撃で制御不能になった福島原子力発電所で、まず一号機が十二日に水素爆発を起こす。その時点で政府は避難指示を二〇キロ圏内の住民に出したのはご存じの通りだ。「念のため」という注釈つきで。しかしその時すでに現場は危機的状況にあったこともまた、今や周知の事実であろう。一四日には三号機が、一五日には四号機が次々と水素爆発を起こした。

葛尾村は国や県からの指示がないまま、一四日の夜に全村避難を決意し、福島市のあづみ総合運動公園に避難した。しかし、村は一五日の爆発後に吹いた風の風下になり、また直後に雨も降り多くの放射性物質によって汚染された。農家が多い葛尾村にとっては、存立にかかわる大打撃だ。

事故から一カ月後以上経った四月二二日になって、政府は汚染の度合いより避難指示区域を指定するが、この時葛尾村はさらに北西にある飯館村などといっしょに「計画的避難区域」と指定された。立ち入れるがそこで生活はできないという指定である。今も住民の半数以上は三春町にある仮設住宅に入居し、あとは借り上げ住宅や縁者を頼って避難生活を強いられている。役場も仮設住宅の隣に移転し業務を行っている状況だ。国は村内の家屋周辺の除染を進め、二〇一三年三月の避難

地域見直しの際に、葛尾村の大部分を「避難指示解除準備区域」へと規制を緩めた。Mさんの話に戻ろう。

■「きぼう」と名づけた子牛

Mさんは子牛を育てて売る繁殖農家だった。三月一四日の全村避難の時も、牛の世話をしなければならないので、奥さんと子供たちを避難させMさんは村に残った。そんな前代未聞の事態が続く中、震災後一〇日目に待望の雌の子牛が生まれた。Mさんは思いを込めて「きぼう」と名づけて、奥さんとともに可愛がった。三月二四日、いつも牛を出している浪江市場が閉鎖になり、やむなくMさん達は市場を変えて販売すれば牛の数が減るだけ避難もしやすいと考え、県に要望を出す。が、県からの返答は「原子力発電所から二〇～三〇キロ圏内で飼育されていた牛は、市場を変えて販売してはならない、三〇キロ圏外に移動させてはならない」という厳しいものであった。しかも農水省からは家畜の放牧禁止、および放射能汚染された水や餌を与えてはならないとこれまた厳しい通知が来た。当時、すでに牛乳から放射性物質が発見されて大騒ぎになっていたのも事実である。

しかし葛尾村の畜産農家は行き詰った。放射能汚染されていない餌や水は、いったい村のどこを探せばあるのだろう。しかも県からは牛の移動は禁止と指針が示されている。結局Mさんは、飼育していた牛の全頭をロープで柵につないで餓死させた。あの「きぼう」と名づけた子牛も一緒に。

「二〇～三〇キロ圏の牛はスクーリング後、三〇キロ圏外へ出荷、移動させてもよい」という農水省の決定が出されるのは、四月二二日、村の牛たちがあらかた処分された後だった。

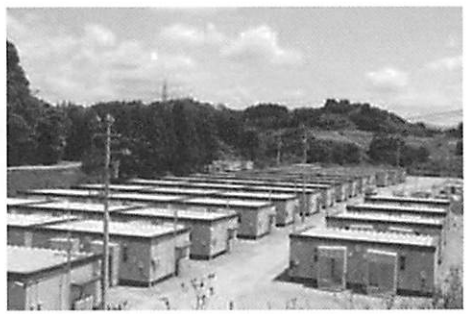
Mさんの話を聴いて、私たちは奥さんの話もぜひ伺いたいとお願いした。奥さんは言う。夫のMさんが当時村の和牛農家でつくる「葛尾和牛改良組合」の組合長をしていたために、私がどんなにつらかったかと。というのは、組合長のMさんに牛をどうしたらいいかの問い合わせが殺到したからだ。避難所にいない夫の代わりに、その質問は奥さんに向けられた。「私は何も知らないと言っても、何度も聞かれる。しまいには避難所にいるのが苦痛になった」と。そして夫といっしょに可愛がっていた「きぼう」を、柵に繋いだ日のことに話が及んだ。「夫は絶対お前は来るなと、肩を怒らせて出ていった」と語りはじめた途端、涙声になった。もちろん聴いている私たちも、涙々である。

ほかにも、自給自足をめざして目途が立ったと感じていた人、都会から移り住んで自然農法を手掛けていた人など葛尾の自然と一体になっての一人一人の生活だったことが思い知らされる。畜産農家の方からはこんな声も出された。「四七〇戸の村に五百億、六百億の除染費用をかけても、山も林も手つかずでは、線量はなかなか低くならない。それよりもそのお金を各戸に一億円ずつ賠償金としてくれれば、俺たちはプロだからほかの土地を買ってまた牛が飼える。今みたいに生活費ぐらい補償されても何もできない」。またこういう声もあった。「震災以後も電気は使えるし、生活するのに不自由はなかった。俺たちが使っているのは東北電力で、東京電力の電気なんて、これっぽっちも使ってなかったからなぁ。」なるほど、山ひとつ隔てた福島原子力発電所が産出する膨大な電力は、葛尾村には何の貢献もしていなかったのだ。

■仮設住宅

翌日も幸い晴れた。が、寒さはやはり東京とは違う。朝、バスに乗り込み、同じ三春町内に建つ葛尾村住民が住む仮設住宅を見学する。元は田んぼだったという高台の更地に、その仮設住宅がびっしりという表現が適切なのかは分からないが、整然と並んでいる。二軒続きのバラック建て。通路は人が一人通れるぐらいだろうか。ここで三年間辛抱するのは並大抵のことではない。もし、私の両親だったらと、思わず高齢の二人の顔が浮かんだ。

同じ敷地内にやはりバラック建ての葛尾村の役場がある。つらい状況にある住民の方にはやはり心丈夫なことだろうと、少し安堵した。茫然と見ていると、昨夜、交流会に参加された葛尾村の方が「ここら辺りは冷えるから」とホカロンを全員分届けてくださった。



福島県三春町の応急仮設住宅
（2014 年撮影・ネット検索による写真）

■避難指示解除となった田村市都路地区の事情

仮設住宅がある三春町は福島原子力発電所からほぼ五〇キロである。そこからバスは西に向かい、原発から二〇～三〇キロに位置する葛尾村に向かった。途中、二〇一四年四月一日の避難指示解除を目前に控えた田村市都路地区に立ち寄った。田村市は葛尾村の南に隣接し、震災前は四万人の人

口を抱えていた町だ。その田村市の西の地域が都路地区で、原発から二〇キロ圏内の地も域内に含んでいる。都路地区にあっては、除染後すでに二〇キロ圏外は避難指示解除となっている。が、この四月以降は二〇キロ圏内も避難指示を解除しようというのである。

二〇キロ圏内の警戒地域で避難指示が解除されるのは、都路地区が最初で、政府としても鳴り物入りで復興をアピールしたいところだ。実際、私たちがツアーを開始した三月八日には、安倍総理自らが都路地区を訪れ住民と対話をしたと、映像付きで各メディアにのって流された。もっとも後から聞けば、総理と話したのは前々から帰還したいと発言していた住民で、それがすべての都路地区の人の意見というわけではない。確かに除染されたとはいえ、被ばく線量が限度値とされる年間一ミリシーベルトを越えるようなホットスポットも残っている。住民の気持ちは「解除となって、バンバンザイ」とはなかなかいかない。そのあたりの複雑な状況を都路地区に住む二人の住民が、バスに乗り込んで解説してくれた。

「都路地区の住民にとっては、帰還するか否かの判断は大変難しい。いろいろです」と話し出したのは元市議の女性。確かに若い世代にとっては、子どもの健康や自らの健康のことを考え、帰還には不安が先立つ。逆に年寄り世代は早く戻りたい。当然、両者の意見が合わず、家のなかはぎくしゃくする。政府は若い世代の不安を見越したように、避難指示解除後の四月一日から、真っ先に学校を元の校舎で再開させるという。その上一年後には賠償金の支払いも打ち切る。若い人たちは、大きすぎる決断を、政府の方針に急かされるように短期間に強いられることになる。

しかも都路地区と川内村の村境にある「東電いわき南開閉所」の敷地を利用して、環境省は放射

能汚染ゴミの減容と称し、汚染ゴミの仮焼却炉を建設する計画を進めている。私たちもその場所をバスから降りて見学したが、村境といわれるだけあって山あいにあり、もし事故があったら、放射性物質は風に乗ってふもとの町々に降り注ぐ可能性が高い。地下水の汚染も心配される。

一方で住民の帰還を促しながら、一方では危険な放射能汚染ゴミの焼却炉を同じ都路地区に設置しようという政府の政策は、私の理解を超えるものだ。住民の方も反対運動に動いておられると聞いたが、当然だと思う。

■詩人の家

いよいよバスは葛尾村に入った。途中の道路わきに黒い大きなゴミ袋が延々と積まれている。中身は除染で出た汚染ゴミであろう。都路地区に減容焼却炉を設置することは得心が行かないが、このゴミをどう処理するのだろうと考えると、ため息しか出てこない。車窓には山里の風景が開けていく。畜産農家が多かったというが、どのあたりで牛を飼っていたのだろう。北海道のような平坦に広がっていかにも牧場地帯という景色は見えない。坂口さんに訊くとそのあたりにいたんですよと、あまり広くない高台の場所を指してくれる。あそこにも、ここにもと。なだらかに続く裏山や畜舎をうまく利用して飼っていたのだろうか。家と家の間隔が広く、隣まで山を二つ越えていく家もあると言う坂口さん。山に抱かれるようにポツン、ポツンと家々が立っている。三春町で見た仮設住宅と、なんと違うことだろう。あらためて葛尾の方々が気の毒でならない。その責任の一端は、東電の電力消費者である私のもあるのだが。

杉だろうか一段と木々の緑が深くなり、山間に入った所に小島さんの家があった。舗装された道路からさらに一〇メートルほども山の斜面を登る感じだ。辺りは、踏めばズボッと沈むほど雪が残っていた。が、そのおかげで放射線量が低いという。枯葉や土と放射性物質は親和性がよく、山の線量は高く出るのが普通だそうだ。山道を歩いて放射性物質を靴につけないよう、坂口さんからあらかじめ靴カバーを渡されていたが、雪のおかげで使わずじまいで済んだ。

小島さんのご自宅(「涙滂々ツアー」感想文集より)

雪道を歩いて、山の中の一軒家の詩人の家に到着。裏山の冬林が温かな気配だ。庭先に手作りのブランコやハンモックが揺れている。「草茫々／田畑茫々」という小島さんの嘆きが心に沁みてくる。除染の対象となるのは家から二〇メートルの範囲で山林は対象にならない。自宅前で放射線量をはかった人が、値の高さに驚いている。山ふところのこの家に、将来小島さんは帰ることができるのだろうか。そして、もしも帰れないとしたら、愛らしい、思い出が詰まったこの家はどうなるのだろう。

■無人の町

小島さん宅を見学した後、今度は葛尾村のメインストリートにバスはやってきた。村で唯一の交

差点がこれ、ガソリンスタンドがあるぞ、学校に立派な村役場だねと、バスを降りて私たちは周辺を散策した。葛尾川の流れが耳に心地よい。春を待つように小鳥たちのさえずりも聞かれる。ただ、人の声がしない。人影も見えない。村一番の「繁華街」であるはずなのに。まだ新しい家がけっこうある。モルタル造りの家々の壁に柔らかい陽射しがあたって、今にも縁先から声がかかりそうだ。それなのに人影もなければ、人の声も聞こえないというのは、こんなにも落ち着かない奇妙な気分にさせるものだろうか。元気に村の探訪を始めたツアー仲間も、次第に寡黙になっていく。

早々に外歩きを切り上げて乗り込んだバスの車窓から、早春の山里の景色が流れていく。青空に伸びる裸木の枝々も、しばらくすれば芽吹きの季節を迎えるだろう。美しかったというチェルノブイリのことがなぜか心に浮かんできて、私は胸が痛くなるようだった。

「東電に、ばらまいた放射性物質を全部持って帰ってくれと言いたいよ」と牛を飼っていた男性が昨晩話していた。仕事、家、平穏な生活をまるごと奪われた葛尾村。避難解除準備地域であっても、自宅周辺の除染ぐらいで本当に帰還できるかは分からない。またたとえ帰還できてもどれほどの人が帰村するかもまったく不明だ。八七年に小島さんは「今日」を見通した詩を書いている。

私　そんなに大きな幸せを
願っているわけではないのです
でも　その私が今触れている
ささやかな日常の

ささやかな幸せすら
押しつぶし　突き崩してしまう
原子力発電所
そしてこの世の中の仕組み

もしも今
私たちが
何も言わなければ…

もしも今
私たちが
何もしなければ
　何もしなければ…　（小島力「もしも今何もしなければ―ある母親の思いから―」）

坂口さんは二〇一五年も葛尾村探訪ツアーを企画したいと、実行委員を募る手紙をくださった。実行委員にはなれないが、ツアーには参加するつもりだ。葛尾村の一人一人がどういう決断をしていくのか、避難解除後の問題点は何か、もう少し見つめていければと思っている。

※二〇一四年三月一七日、ＮＨＫ総合テレビで「福島県葛尾村～全村避難を決断した村～」が放映された。

◆旅のレポート◆

六千人の命のビザ　～杉原千畝をたどる旅より～

吉澤エミ

はじめに

世界に誇れる「日本人」と、誰もがその名を挙げ称賛する人“杉原千畝”。在リトアニア領事代理であった第二次大戦時の一九四〇年、ナチス・ドイツの迫害から逃れてきたユダヤ人難民たちに、外務省の反対を押し切ってビザを発給し、六千人もの命を救った人である。

杉原千畝

映画、テレビ、演劇、図書など、あらゆる分野でその業績が讃えられ、七四年が過ぎた今なお、感謝の念を抱くユダヤ人が大勢いると聞く。

二〇一四年七月に来日したアメリカ経済界の重鎮シカゴ・マーガンタイル取引所の名誉会長レオ・メラメド氏（八二歳）

もそのお一人。八歳の時、命のビザで日本に上陸、「敦賀で温かく迎えられたおかげで今の自分がある」とテレビで感謝の意を伝えていたのも記憶に新しい。

それまで私の中では「ユダヤ人を助けた日本人外交官」といった歴史上の人物でしかなかった杉原千畝が、今でも「諸国民の中の正義の人」として語り継がれていることを知ったのは、昨年（二〇一三年）九月、バルト三国の旅で訪れたリトアニア第二の都市、カウナスにある「杉原千畝記念館」でのことであった。

ビザを発給するまでの苦悩、彼にそう決断させたものは何か、そもそもなぜ外交官の道を選び、あえて外務省の意向に反することをしたのか、などなど尽きることのない興味に惹かれて、杉原千畝をたどる旅がはじまる。

ビザ発給を決断するまで

まずは杉原千畝を生涯にわたって支えてきた妻、幸子の著書『六千人の命のビザ』をもとに、その人生のあらすじを述べてみたい。

杉原は一九〇〇年（明治三三年）一月一日、岐阜県加茂郡八百津町北山に生まれる。小学校の頃から成績優秀だった杉原は、父の希望する医学校の受験を放棄し、小さい頃から夢見てきた英語教師をめざし、早稲田大学高等師範英語科に進学する。

しかし学費や生活費の捻出に苦労し行き詰っていた頃、外務省留学生採用試験のことを知る。研修の後には外交官になれるという、杉原にとっては夢のような話であった。猛勉強の末に試験に合格し、当時修得者が少なかったロシア語を学ぶことを決意、ハルピンにあった日露協会学校（後のハルピン学院）に入学する。

書記生となった杉原は「ソヴィエト連邦国民経済大観」と言う報告書をまとめたり、北満鉄道交渉に当たり、巧みなロシア語で譲渡交渉を担当、当時のお金で四億円以上の値引きに成功し、日本に有利な外交を展開していく。こうして杉原の調査能力や情報収集能力が認められていく中、一九三五年、一度日本に戻り、菊地幸子と結婚する。

一九三六年、在モスクワ日本大使館二等通訳官に任命されるが、ソ連の反対で着任できず、翌年一九三七年八月フィンランドの在ヘルシンキ日本公使館代理公使に任命され、妻幸子、長男弘樹、幸子の妹節子を伴って着任する。

二年後の一九三九年七月、ドイツがポーランドをねらい動き出す形勢があらわになり、その情勢を探り、本国へ連絡するため当時日本人もいない、日本とも一切かかわりのないリトアニアの領事代理としてカウナスに着任する。

一九四〇年七月一八日早朝、約二百人に及ぶユダヤ人が日本の通過ビザを求め、カウナスの日本領事館に押し寄せる。ナチスの手を逃れ、ポーランドから避難してきたユダヤ人にとって、ソ連、日本を経由し第三国に逃れること、それが生き残るための彼らに残された唯一

の手段であった。

押し寄せてきたユダヤ人群集を前にして杉原は悩む。杉原のもとに駆けつけたユダヤ人の多くはパスポートや渡航費も十分持たず、発給に必要な要件を満たしていなかったのである。

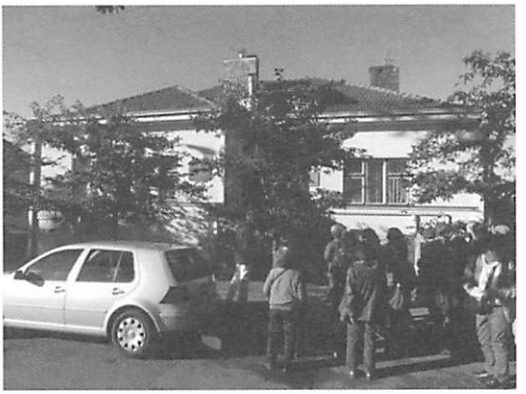
さらに第二次大戦下、日本は「日独伊」の三国同盟を模索中であり、ユダヤ人にビザを発給することはナチス・ドイツを刺激することになるといった複雑な時代背景もあった。

ユダヤ人たちの列は日増しに増え、この先さらに増えていくだろうと察した杉原は、日本の外務省に向け電報を打つも外務省からの回答は「ノー」であった。杉原は悩みに悩んだ末、本国の命令に背き、目の前で恐怖におびえている人の命を守ろうと決意する。一旦決意するや、一人でも多くと寝食を忘れ、手を痛めながら書き続けた。

八月三日ソ連はリトアニアを併合。カウナスにある外国公館は八月二五日までに閉館されることになり、杉原は出国するまでの滞在先であったホテルで九月五日カウナスの駅を出発するその日までビザを書き続け、最後の一枚を車窓から手渡す。杉原と家族を乗せた列車は次の任務地となるドイツ・ベルリンへとむかう。

リトアニア　カウナスで知った「命のビザ」

当時リトアニアの首都であったカウナスにある「杉原千畝記念館」を訪れたのは二〇一三



カウナスの記念館にて

年九月二五日。かつての旧領事館は小高い丘の上の閑静な住宅街にひっそりとたたずみ、庭に植えられたりんごの木は枝をひろげ庭いっぱいに自然の香りをただよわせていた。

建物は一階、二階、半地下の三層からなり、半地下は当時のままに執務室が残され、家族のプライベートフロアであった一階と二階には命のビザ、パスポートのコピーや写真の展示が、さらに一階部分ではビザ発給時、家の周りの柵を囲み必死の形相で訴えるユダヤ人の姿やとまどう家族の様子、ナチ・ドイツの暗躍する時代状況をリアルにビデオで見ることができるように工夫されていた。カウナスのこの記念館は、その後の私の杉原千畝をたどる旅のスタート地点ともなった場所でもある。

岐阜県八百津町を訪ねて

杉原千畝が生まれ育った八百津町とはどんなところなのだろうか。また日本通過のビザを

受け取り、日本に渡ったユダヤ人はその後どんな人生を歩むことになったのか。

バルト三国の旅から戻って、一ヶ月後の十月三日、八百津町の小高い丘の上にある「杉原千畝記念館」を訪れてみる。岐阜産の総檜造りの記念館は杉原の生誕百年にあたる二〇〇〇年七月に開館。館内は杉原の生い立ち、命のビザやユダヤ人難民の足跡を紹介するパネル、当時の執務室を再現した「決断の部屋」や、ビザ発給当時を回想する杉原の肉声も聴けるように工夫されている。

道路を挟んで向かい側にある「人道の丘」は一九九一年、杉原の功績を後世に伝えようと八百津町が三年の月日をかけて建設したものとか。丘の上には命のビザを重ねたモニュメントが建ち、三つのカリオン（愛・心・勇気）の音が丘いっぱいに響き渡っていた。

丘の上から眺める八百津の町は、周囲を山々に囲まれ、のどかな田園風景の中にあった。

この日記念館はイスラエルからの観光客でにぎわっていた。案内していたのは国際交流員のハニト・リバーモアさん。イスラエル人である。来日したのは一七年前、兵役を終えたばかりの二〇代前半の頃であった。日本に旅行に来たのがきっかけとなり、ヘブライ大学で日本語を学び交流員の試験に合格、八百津町の役場に配置される。ホロコーストの歴史や杉原千畝のことを多くの人に知ってほしいと熱く語るハニトさん。

一年間にこの記念館を訪れるユダヤ人観光客はおよそ二千人。主にイスラエルからの訪問者であるという。記念館見学の後、杉原が幼年時代を過ごした故郷、北山地区にむかう。

北山地区は「日本棚田百選」に認定されるほど、棚田、里山の風景で有名なところだ。千畝の名前の由来も故郷のこの風景に因むとの話も聞く。

幼年時代、家族とともに住んだ家は今はなく、母なつの実家は棚田を見下ろす高台にあり、昔風の家の佇まいを残している。そこで偶然出会ったのが家に隣接する畑で農作業をしている杉原の又従兄弟に当たる岩井錠衛さんと富子さん夫妻。農作業中にもかかわらずご自宅に招き入れてくださり、幼き日に出会った杉原とのエピソードを話してくださるのだった。岩井ご夫妻は八八歳。年齢差を考えると、多分シベリア経由で日本に引き上げ、外務省を退任し食糧にも困窮していた頃のことであろう。棚田を走りまわる幼き日の杉原に想いを馳せながら、北山の岩井宅をあとにする。

人道の港　敦賀へ

命のビザを手にしたユダヤ人たちは、シベリア鉄道に乗り、モスクワ経由で極東の地ウラジオストックに向かう。そこから船に乗って日本に上陸。だが道中、ユダヤ人たちは様々な危険に直面する。ソ連の官吏らに賄賂を要求されたり、秘密警察にスパイと疑われ逮捕されたり、列車を降ろされ強制労働に駆り出されたりと困難を極めるものであった。

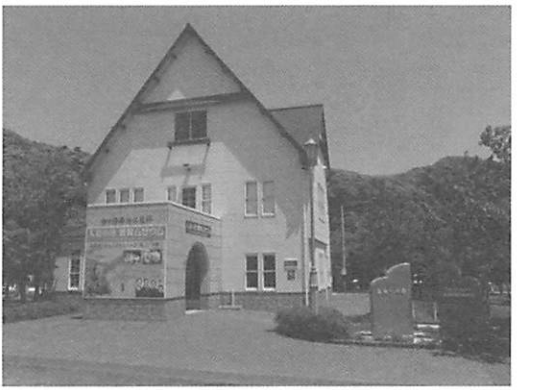
ぼろぼろの服にすり切れた靴、すきっ腹に不安を抱え、つらく苦しい旅路を経てやっとた

どり着いた敦賀の港。人々はユダヤ人に食べ物を分けてあげたり、銭湯を無料で開放したり温かくもてなした。ユダヤ人にとって敦賀の町で受けたもてなしは天国や楽園のようだったという。長い間つらく厳しい迫害を経験してきたユダヤ人にとって「迫害がない」ということ自体、天国のようであったのかもしれない。

日本に長期滞在が許されなかったユダヤ人たちは数日後敦賀をあとに、神戸や横浜などの国際線の就航する港町をめざし、日本のユダヤ人協会の協力のもと、上海やアメリカ、イスラエルなどの移住地へと旅立つ。彼らの険しい旅路は第二次大戦の終戦まで続く。

敦賀港は一八九九年（明治三二）外国貿易港の指定を受け、一九〇二年に敦賀とウラジオストックのあいだに直通航路が開設される。一九一〇年には駐日ロシア領事館が開庁され、さらに一九一二年にはシベリア鉄道を利用してヨーロッパの各都市を結ぶ拠点港となり、新橋駅（東京）と金ヶ崎駅（敦賀）には欧亜列車が運行され「東洋の波止場」として発展する。

「人道の港　敦賀ムゼウム」を訪れたのは二〇一四年五月十一日。敦賀港湾を間近に見る広い緑地の一角に立つこじんまりとした洋館、それが敦賀ムゼウムである。ムゼウムとはポーランド語で資料館のこと。二階建ての館内の一階は、来館者のメッセージや交流の写真の展示コーナーがあり、当時の上陸の様子を伝える新聞記事や目撃証言なども展示されていた。



人道の港　敦賀ムゼウム

さらにユダヤ人難民が上陸する二〇年も前の一九二〇年から二二年、ロシア革命（一九一七年）時にシベリアで家族を失ったポーランド孤児達七三六人が日本赤十字社の救助により、敦賀港に上陸、滞在期間が数時間、長くとも一日のみという中で休憩所や宿泊所、鉄道の無料提供などで温かく迎えたことが展示の中に紹介されていた。ユダヤ人ばかりでなく、日本とポーランドの間も深い絆で結ばれていたことを敦賀に来て初めて知ることとなった。

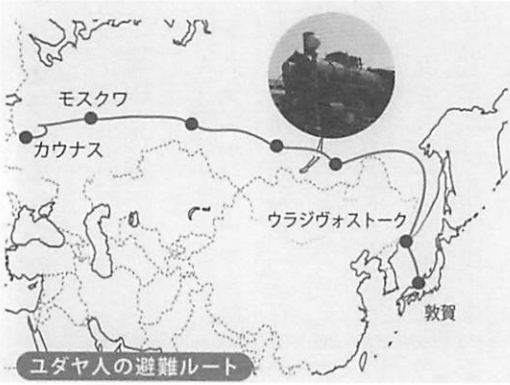
港を見渡す鉄道公園の一角には、一九九九年七月二〇日幸子夫人によって植樹された記念樹の桜が緑の葉をそよがせ、道往く人の目を優しく包み込んでいた。

ユダヤ人を迫害し、大虐殺（ホロコースト）という極めて残虐な行為を行ったナチス・ドイツはいかにして誕生し、台頭したのか。

一九一四年に勃発した第一次大戦で敗北したドイツは未曽有の戦死者を出し、多額の賠償金を請求され経済的破綻に陥っていた。その後アメリカに端を発した世界恐慌でさらに窮地

に追い込まれていったドイツは、ヒトラー率いる国家社会主義ドイツ労働党（ナチス）が政権を取り、「ドイツの再建、反共、反ユダヤ主義」を掲げ、独裁体制を敷いていく。ポーランドをはじめ、ヨーロッパ各地に領土を拡げ、徹底した反ユダヤ主義を掲げ、追いつめていく。

第二次大戦中、ナチス・ドイツによって命を奪われたユダヤ人は六百万人にものぼるという。居住を強制され、過酷な環境下で多数の餓死者を出したゲットー。アウシュビッツに代表されるガス室での大虐殺が行われた絶滅収容所。そうした恐怖の中、ポーランドのユダヤ人たちは国を捨て、最後の希望と頼ったのが日本であった。



ユダヤ人の避難ルート

日本はヨーロッパの国々と違い、ユダヤ人への差別感情や偏見はなく、むしろ日露戦争で資金面の協力者として肯定的な見方があったといわれる。こうしてユダヤ人たちは地理的にも近いリトアニアのカウナスの日本領事館に押し寄せ、平和な地へ逃れようとしたのだった。

第二次大戦中、かろうじてナチスの手から逃れ生きのびたユダヤ人たちは、その後、どんな道を歩むことになったのか。なぜ幾世紀にもわたり、職業を選ぶ権利も自由もなく、長い間離散を強いられてきたのか。

イスラエルへの旅

建国への道

イスラエルへ行こうと思い立ったのは、二〇一三年一〇月。リトアニアのカウナスで杉原千畝記念館を訪れた一ケ月後のことであった。幾世紀にわたり離散の歴史を重ね、流浪の民となったユダヤ人が、一九四八年、パレスチナの地にイスラエル国を建国、以来六六年後の今なお紛争の絶えることのないイスラエルの地。

一九六九年には杉原もイスラエル政府の招聘でこの地を訪れ、勲章を授与されている。一九八五年には「諸国民の中の正義の人賞（ヤド・バシエム賞）」を受賞するなど、縁の深い地でもある。

イスラエルといえば、私の中ではずっとパレスチナという一つの土地の支配をめぐって、絶えることなく続く紛争の地であった。

一九七二年五月、岡本公三ら日本赤軍三人のメンバーがテルアビブのロッド空港で起こした乱射事件は、今も残虐極まりない行為として生々しく記憶に残っている。今も絶えること

なく続く戦争。イスラエル建国の背景には何があったのだろうか。そもそもユダヤ人はなぜこれほどまでに差別を受け、迫害されるに至ったのか。

今から二〇〇〇年も前の西暦七〇年、ローマ軍に敗れイスラエルを追放されたユダヤ人はヨーロッパの各地に離散を余儀なくされる。各地に散ったユダヤ人は自分たちの宗教、文化を守り続け、キリスト教が広がったヨーロッパで異質な存在になっていく。

キリストを十字架にかけ殺害したとして恨まれ、十一世紀にはキリスト教徒による十字軍遠征をきっかけに、ユダヤ人に対する迫害は激しいものとなっていく。農業を禁じられ、手工業ギルドにも参加できず、中世においては金貸し業に携わっていくしかなかった。それがまた反発を買い、反ユダヤ主義はますます高まり居住地（ゲットー）へと追いやられるようになる。

第一次大戦後ヒトラー率いるナチス・ドイツが「劣等人種であるユダヤ人を排除しろ」と訴え、ユダヤ人はすべての権利をはく奪され、アウシュビッツなど強制虐殺収容所に送られるようになる。

各地に広がるユダヤ人への迫害に、ヨーロッパではシオニズム運動（パレスチナにユダヤ人国家を建設しようとする運動）が起こっていく。その運動が高揚しはじめた一九世紀末期、イギリスは、ユダヤ民族国家建設に協力することと引き換えにユダヤ人の協力を求め、第一

次大戦で勝利する。

パレスチナの委任を国際連盟から認められたイギリスは、世界各地からユダヤ人を移住させる。第二次大戦ではオスマン帝国に勝利するため、アラビア半島のアラブ人にユダヤ人の場合と同じ手口で協力を求め、結果パレスチナの地に混乱を招く。

統治に失敗したイギリスは一九四七年国連に統治を委託、一九四八年国連はパレスチナの地をアラブ国家とユダヤ国家に分割する案を採択し、エルサレムを国際管理下に置くことを決議する。当時人口の少ないユダヤ人側に有利なこの案はアラブの反発を買い、第一次中東戦争から大四次中東戦争そして現在に至るまでの六六年間、両国の間に紛争が繰り返され多くの犠牲者を生みだしている。

イスラエルへ

イスラエルへ行こうと決めて準備に取りかかりはじめた頃の二月中旬。なんということだろうか、都内の図書館や書店で『アンネの日記』の破損事件が起こる。誰が？　何の目的で！事件は未解決のまま、二〇一四年三月五日、旅立ちの日を迎える。

※後日、この事件は東京都小平市に住む三六歳の無職の男性によるものと分かったが、精神鑑定の結果、心神喪失状態だったと判断され、不起訴となる。

成田発、イスタンブール経由でイスラエルにむかう旅のテーマはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教の三大宗教の聖地めぐりをするというもの。キリストゆかりの地である北部ガリラヤ湖周辺、ローマ軍と戦った悲劇の要塞跡「マサダ」、そして三大聖地エルサレムをめぐるという欲張ったコースである。

イスラエルの面積は日本の四国とほぼ同じだが、砂漠地帯がその多くを占めている。人口は約七六二万人。ユダヤ教徒が七七％と圧倒的多数である。

厳しいチェックがあるといわれた入国審査もスムーズに済み、旅はテルアビブからスタート、地中海沿岸を北へと進む。まずはローマ時代の円形闘技場、十字軍の城塞跡地など古代の歴史に彩られた遺跡の町カイザリアや、イスラエルの海の玄関口ともいわれるハイファを通り、二日間の宿のあるガリラヤ湖畔へとむかう。宿はキブツの経営する「ノフ・ギ・ノサール・ホテル」。

キブツとは集団農業団体のことで、イスラエルの国家発展を支えてきた社会組織である。一九一〇年頃、東欧からパレスチナに移住した青年らがガリラヤ湖畔に土地を確保し、集団で生活したことが始まりである。

現在はイスラエル国内に三〇〇ほど存在するという。このホテルは部屋もシンプルで清潔。日本のユースホステルのようだ。明日（六日）から二日間はここを拠点にイエスゆかりの場所めぐりをすることになる。

イエスゆかりの地とユダヤ民族の誇りとする要塞跡をたずねて

旅は、聖母マリアの生まれた家跡に建てられたという受胎告知教会の見学から。ガリラヤ湖山頂ではイエス・キリストが信者の前で説教したといわれる山上の垂訓教会へ。午後は野に咲く花を眺めながらの小道の散策とガリラヤ湖のボートクルーズを楽しむ。緑に包まれたイスラエル北部は穏やかな春の香りに包まれていた。

旅の中日（なかび）はイエス・キリストが洗礼を受けたといわれるヨルダン川とユダヤ人の民族の誇りであり、民族結束の象徴ともされる「クムラン」と「マサダ国立公園」にむかう。

クムランは死海の西北部から約一キロメートル。紀元前二世紀の終わり、クムラン教団といわれる禁欲的なユダヤ教徒の一派が共同生活を始めたところとされる。

一九四七年、近くを歩いていたベドウィンの少年がクムランの洞穴で土器に入った巻物を発見、後にユダヤ経典と判明し、二〇世紀最大の考古学的発見といわれたものである。

マサダはローマ軍に追いつめられた最後のユダヤ人が籠城したところ。民族の誇りを捨てずに立てこもり、抵抗し続け暑さと渇きの中、九〇〇人余りが自決した場所とされる。今「ノーモア・マサダ」は民族の誇りのスローガンとしてユダヤ人の心のよりどころとなっている。現在でもイスラエル兵の入隊宣誓式はここマサダ要塞で行われるのだという。

聖地エルサレムで

旅の後半はいよいよ聖地エルサレムだ。三月九日、塩水湖として有名な死海で浮遊体験をし、茶褐色一色の砂漠地を後に、緑の眩しい道を一路エルサレムをめざす。

エルサレムでは、まずオリーブ山にむかい、展望台から旧市街を眼下に望む。神殿の丘に建つイスラム教の岩のドーム、アル・アクサー寺院、聖墳墓教会、ユダヤ教徒の墓地と三大宗教の地は時が止まったままに静逸である。

岩のドームと嘆きの壁

エルサレムでの滞在期間は二日間。第一日目はキリスト教最大の巡礼地「聖墳墓教会」、ユダヤ人にとって最も神聖な地「嘆きの壁」、イスラム教徒の聖地「岩のドーム」、さらにはイエスが十字架を背負って歩いた悲しみの道「ヴィア・ドロサ」をたどるなど、かなり欲張ったものだ。

「嘆きの壁」は西暦七〇年、ローマ帝国によって破壊されたエルサレムの神殿を囲む城壁の内唯一残った西側の一部分で「西の壁」ともいう。

「嘆きの壁」の名の由来は、岩が夜露で涙したように見えることからともいわれている。ここは一九六七年の第三次中東戦争で、ヨルダンから奪還したものである。この日、黒装束に身を包んだ大勢のユダヤ教超正統派の人たちが、聖書を片手に壁に向かい祈りを捧げていた。ちなみに超正統派ユダヤ教徒はユダヤ教の教義の研究のみに一生を捧げ、労働は一切せず、兵役も税金も免除されているという。避妊も絶対禁止のため、子どもが一〇人いるという家族も珍しくはないそうだ。

パレスチナ地区の聖地ベツレヘムへ

エルサレム二日目（三月十一日）は、パレスチナ地区の丘の上にある聖地ベツレヘムへ。ユダヤ人はパレスチナ地区には入れないため、ガイドのKさんは途中でバスを降り、パレスチナ地区のガイドに代わる。

厳しいかと思われた検問所もスムーズに通過、イスラエルとパレスチナを隔てる高い壁を抜けると町の雰囲気は一変。道端にゴミがたまり、道の両側に並ぶショップも薄暗く、イスラエルとの経済格差は歴然としているように見える。

仕事もなく、収入も乏しいといわれるパレスチナ人。観光客を見つけては駆け寄ってくる物売りや道を行きかう人の姿は、貧しげで痛々しげに見える。

ベツレヘムではイエスの生まれたとされる聖地、聖誕教会を見学する。イエス・キリストが生まれた場所は教会の地下洞窟。洞窟の中には銀の星の形がはめ込まれた祭壇があり、おおぜいの信者（観光客？）がそこに手をかざし祈りを捧げていた。

その他にもマリアの乳が地面にこぼれ、赤土が一気にしてミルク色に変わったという伝説のミルク・グロットを見て、再びイスラエル地区に戻る。

「最後の晩餐の部屋」、「ダビデ王の墓」、十字軍時代の商店街などをのぞき一日の観光を終える。私などのように宗教心のない者にとっては、聖地めぐりというコースはあまりにハードで、その割には印象が薄れがちである。

旅の最後の夜、夕食のために立ち寄ったエルサレムの新市街は眩しいほど明るく、活気にあふれていた。大通りの真ん中を走る路面電車、若者たちはショップをのぞき、手を繋いで道を歩く親子連れなどイスラエルを旅してはじめて目にした街の光景。

常に危険と隣り合わせに暮らしているイスラエルの人々にも、私たちと同じ普通の日常があることにホッとする。

今から四五年前の一九六九年、ユダヤ人の命の恩人としてイスラエル政府の招聘を受け、この地を踏みしめた杉原千畝、このエルサレムの町にどんな思いを抱いていたのだろうか。

杉原千畝最後の任務地　ルーマニアへ

第二次世界大戦時の紛争地・ブカレストで

ルーマニアの首都ブカレストは、杉原が一九四一年一二月ルーマニア国の日本公使館一等通訳官として赴任し、一九四六年シベリア鉄道で帰国の途に就くまでの五年間を過ごしたところである。とはいっても外交官としての任務に就いたのは三年半のみ。残りの一年半はブカレスト郊外のソ連収容所で家族とともに過ごすことになる。ブカレストではどんな生活を送っていたのだろうか。再び幸子の著書『六千人の命のビザ』でその様子をたどってみることにする。

当時、第二次大戦で、独伊の枢軸国側に加担していたルーマニア。首都であるブカレストにはドイツ軍が駐留。街はきらびやかな勲章を胸に飾って街中を闊歩するドイツ兵など、ドイツ一色に塗りつぶされていた。

独伊と同盟を結ぶ日本公館は、二年間ほどは外交官同士の交際も頻繁に行われ、比較的平穏な日々を過ごしていた。杉原一家は車で一時間ほど離れた郊外に別荘地を見つけ、日曜日にはよくドライブなども楽しんでいたという。

しかし二年も過ぎると、ブカレストの街は空襲に脅かされ、危険が迫ってくるようになる。一九四四年七月にはヒトラーの暗殺未遂事件が、八月にはパリにいたドイツ軍が降伏するなどドイツの敗退は誰の目にも明らかになっていく。ドイツの支配下にあったヨーロッパの各都市への爆撃が激しくなっていくのもこの時期である。

避難した方がよいとの助言を受け、トランシルバ地方のブラショフの山上の別荘地、ポアナブラショフに避難をする。一九四四年夏のことであった。ポアナブラショフに疎開してすぐ、ブカレストは爆撃にあい多数の死者も出るようになる。

一九四五年三月、ソ連軍が国境を越えて、ルーマニアに進入。ソ連の激しい攻撃にドイツ軍は後退、まもなく撤退する。四月三十日ヒトラー自決。日本に対しても降伏を促すポツダム宣言が出される。

一九四五年七月、大使からの命を受けブカレストに戻ってみると、かつてドイツ兵が闊歩していた通りは、ソ連兵に代わっていた。まもなく日本公使館の者はソ連軍に軟禁され、外には一歩も出られない状況が続く。八月一五日、日本がポツダム宣言を受諾して三日後、ソ連の将校があらわれて、収容所行きを告げる。収容所はブカレストの郊外にあるルーマニア軍の兵営であった。そんな兵営でひと月、ふた月が過ぎ、季節はいつの間にか秋から冬へと移り、何もすることもなく時は過ぎていく。

二度目の冬を迎えようとした頃、突然ソ連軍将校が収容所にあらわれ「これから日本に帰

国させる。直ちに出発」と告げられる。ブカレストの冬は零下二五度。これからさらに寒さの厳しい地シベリアにむかうことになる。先行きへの不安を抱えての旅立ちであった。

ルーマニアの旅　―トランシルバ地方―

私がルーマニアの首都ブカレストの街を通り抜けたのは、二〇一四年七月一三日。隣国ブルガリアを観光した後、トランシルバ地方のブラショフにむかう途中のことであった。バスの車窓から眺めるブカレストの町は、共産主義時代の灰色の建築群が重く街を覆い息のつまる思いであった。

杉原一家が住んでいたリゾート地ポアナブラショフの近くの古都ブラショフはブカレストとは違い、ドイツ・ザクセン人の作った中世の街の雰囲気を残し、しっとりとした佇まいであった。街を歩く人たちもラテン系らしく、おおらかで明るく陽気。結婚パーティーを開いている会場をのぞきこんでいる私たちを「ウエルカム！」と招き入れてくれるなど屈託のない明るさに、旅心は一瞬にして開放感に包まれるのだった。　杉原一家も先行きに不安を抱えながら、ポアナブラショフの別荘から時々この町を訪れ、町の印象を深く心にとめていたようである。

さらにブラショフと日本の間に深いかかわりがあるという情報がガイドさんよりもたらさ

れる。ここは東京武蔵野市と姉妹市であり、交流をはじめて既に、二三年にもなるというのだ。

きっかけは武蔵野市出身の指揮者曽我大介氏が、ルーマニア国立ジョルジュ・ディマ交響楽団の指揮者であった頃、武蔵野市の援助のもと六〇人もの団員を日本に招聘したのが始まりとか。

一九八九年の民主革命から三年後の一九九二年、経済的に行き詰っていたルーマニアの人々にこれは大きな希望と勇気を与えることになったという。ブラショフ三日目の一五日には、交流の拠点となっている日本武蔵野センターを訪れ、日本語や日本文化を学ぶ子どもたちや青年たちと交流するといった貴重な体験をする。

日本武蔵野センターにて

その他にもトランシルバ地方ではドラキュラ伝説のお城や要塞教会、羊の群れ遊ぶ牧歌的な田園風景など、数々の観光スポットをまわり、いよいよ明日（一六日）は旅の最終地、ブカレストをめざす。

ブカレストにて

ルーマニアの首都ブカレストは、一九四六年杉原一家が日本の敗戦によってもたらされたみじめさと苦痛を身をもって体験した場所である。

あれから六八年、今ブカレストの人口は２００万人ほど。ルーマニア全体のおよそ四分の一を占めるほど人口が集中する大都会である。

ルーマニアの首都ブカレストは戦後、どう歩んできたのだろうか。第二次大戦で枢軸国の独伊側につき、連合国側の激しい攻撃を受け、その後ソ連の影響のもと共産主義時代へと突き進んでいく。

一九六五年ニコラエ・チャウシェスクが第一書記に就任し、その後大統領となり独裁体制を強めていく。アパート、工場、大きなモニュメントなどが次々と建てられ、灰色の無機質な街並みが出来上がっていく。北朝鮮を訪問した時に刺激を受けてつくられたという「国民の館」は目を見張るほど巨大で威容である。

逼迫していく経済、政権内にはびこる汚職などは一般国民の生活を圧迫していき、貧困にあえぐ国民はいよいよチャウシェスク打倒を叫び、立ち上がる。

一九八九年一二月、政変が起こり、チャウシェスクと妻エレナは銃殺される。テレビに流されたその衝撃的な映像は一つの時代が終わったことを世界に示したものであった。

二〇世紀初頭には「バルカンの小パリ」と称されるほど美しい街並みも杉原一家が赴任していた頃にはすでに軍靴が街を闊歩し、軍事色が一段と強まっていく頃であった。

ヘルシンキやプラハで過ごした自由で華やかな社交の時はなく、外出を控え家に閉じこもることが多かった日々。しかし今ブカレストは「国民の館」ばかりでなく、革命広場や統一広場を囲む巨大な建築群は何か重々しく寒々とした印象を与えるものの、大通りから一歩裏道に入った旧市街は、小さな教会、国立銀行、ロマの宮殿など小パリといわれた時代の瀟洒な建物が、カフェやレストランになって、小パリの面影をとどめている。

旧市街も今や復興に向けて修復工事が着々と進められている。ルーマニアの安い賃金や技術力に注目する国々が投資をし、製造業、自動車メーカーの工場を移転させ始めているという。二〇〇七年にはEUに加盟し、ますます発展していくルーマニア。ブカレストばかりでなく、昔のままの牧歌的な風景を残す地方の町もこれから更に変わっていくのだろうか。

シベリア鉄道で日本へ　―杉原一家苦難の日々―

一九四六年一二月、ブカレストの収容所を出た杉原一家と公使館員たち一七名は、貨物列車につながれた一両の客車に乗り、零下二五度という厳寒の中、オデッサの収容所に着くまでの一ヶ月あまり、シベリア鉄道の列車の中で過ごす。たどり着いたオデッサは荒れた海に

雪が吹きつけ酷寒の中にあった。

その後モスクワ、ノボシビルスク、イルクーツクなどで降ろされ、何日かを収容所で過ごし、ナホトカにたどり着いたのは三カ月後の三月、まだシベリアは厳しい寒さの季節であった。

ナホトカの収容所では一七名全員が広い部屋に入れられ、部屋から一歩も外に出られない状態がしばらく続く。

隣接する収容所は鉄条網に囲まれ、旧満州からシベリアに抑留された日本人捕虜が林で木を切ったり、運んだりと強制労働に駆り出されていた。しかし夜になるとこの捕虜たちと音楽会を開いて、歌を歌ったり交流の場を持ち、久しぶりにくつろぎのひとときを持つ。

ナホトカでしばらく船を待ち、ブカレストを出てから四カ月後の一九四七年七月、ソ連軍将校が突然やってきて「日本に帰す」と告げられる。こみあげてくる喜びとつらかった日々への思いを胸に、急いで荷物をまとめナホトカからウラジオストックに向かう列車に乗り込む。

ウラジオストックからは日本の引揚げ船「興安丸」に乗り、博多港をめざす。船は足の踏み場もないほど混み合い、むせ返るような息苦しさであった。博多港に降り立った時の「日本へ帰った！」という喜びと気持ちの高まりで、涙はとめどもなく流れ止まらなかった。（『六千人の命のビザ』より）

祖国日本での日々

一九四七年四月、外交官として日本の地を離れて一〇年。日本の敗戦により、着の身着のままでたどり着いた故国日本。ひとまず、沼津の妻幸子の実家に身を寄せ、その後外務省の友人の勧めで神奈川県鵠沼に土地を求め移り住む。この年の四月には参議院議員選挙が、五月には新憲法が施行されるなど、時代は大きく変わりつつあった。

この時、杉原の身に思いもかけない事態が起こる。外務省から呼び出され、「君のポストはもうない。退職していただきたい」と告げられたのである。当時、国家財政が逼迫し、退職を迫られた公務員はほかにもいたことは事実である。

「やはり、ユダヤ人へのビザ発給が原因だったのか。あの行為は組織人としては間違っていたかもしれない。しかしその後も命じられるまま危険を顧みることなく、国の利益となる仕事をこなしてきたのだ」とこの外務省の仕打ちにくやしさとやりきれなさと将来への不安を抱えたまま、杉原は退職勧告を受け入れる。

退職後、仕事もなく、生活が困窮していく中、外務省の同僚から「杉原はユダヤ人に金をもらったのだから、生活に困らない」などと根も葉もないうわさが語られるようになる。杉原はそういう噂に一切弁明することも、抗議することもなく外務省とは一切縁を切り、心に封印をして、第二の人生を歩きはじめる。その時、杉原はすでに五〇歳を迎えていた。

語学力を生かし、進駐軍のＰＸのマネージャー、ロシア語をいかして貿易会社やＮＨＫの国際局、ニコライ学院でのロシア語教授と多忙を極めるほど、次々と仕事をこなしていく。

一九六〇年、転機が訪れる。川上貿易のモスクワ事務所長としてモスクワに赴任することになり、五年間のつもりがいつの間にか一五年が経過し、七五歳までこの仕事を勤め上げることになる。

日本とモスクワを行き来する生活が続いていた一九六八年八月、思いもかけないことが杉原の身に起こる。突然イスラエル大使館から「是非お招きしたい」と電話が入ったのだ。二八年前、カウナスでビザを発給したユダヤ人の一人ニシュリ氏からのものであった。再会した時、ニシュリ氏はぼろぼろになったビザを取り出し、感動のあまり涙をおさえることができなかったという。

ビザを受け取り、無事海を渡ったユダヤ人たちは、戦後、杉原を捜し続けていたのだった。ニシュリ氏は杉原と再会した時、初めてあのビザが日本政府の反対を押し切って発給されたものであったことを知る。

それ以後、杉原の行為は六千人の命を救った人として、海外からその功績を讃えられ、杉原の顕彰が様々な形で行われるようになる。

一九八五年にはイスラエル政府により「諸国民の中の正義の人賞（ヤド・バシェム賞）」を

受賞、リトアニアの首都ヴィリニュスには「T・スギハラ通り」ができ、生まれ故郷岐阜県八百津には、「人道の丘公園」や「杉原記念館」が、その他にもドラマや演劇、教科書にまで紹介されるようになった。

杉原がその波乱に満ちた壮大な人生の幕を閉じたのは、一九八六年、八六歳の時。病床の身にあった杉原は側にいた妻幸子に「私のしたことは外交官としては間違っていたかもしれない。しかし私は頼ってきた人たちを見殺しにすることはできなかった」と話したという。亡くなられて既に二八年。今も杉原のその行為を称賛する声は止むことはない。

旅を終えて

二〇一三年九月二五日、リトアニアのカウナスから始まった私の杉原千畝をたどる旅も、二〇一四年七月一八日ルーマニアのブカレストを最終地として一つの区切りがつくことになった。

今も世界のあちこちで宗教や民族、領土の支配をめぐって紛争の絶えない地域がある。今年（二〇一四年）に入って間もなくロシアのウクライナ介入をめぐる紛争、イラク、シリア、新疆ウイグル自治区と日増しに拡大していく紛争地。中でもパレスチナ地区ガザでのイスラエル軍とイスラム主義組織ハマスとの戦闘の激しさ、無差別攻撃による惨状は目を覆うばか

りである。

戦争で犠牲になるのはいつも、子どもたちや女性、高齢者など非戦闘員の一般市民である。これまでイスラエル国の建国（一九四八年）以来、幾度となくくり返されてきた戦争。今回は六月三〇日、パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区でユダヤ人の少年三人が遺体で発見されたことが引き金となった。

七月一日にはイスラエル側のエルサレムで、アラブ人少年が焼死体で見つかり不穏だった空気に一気に火がつくことになった。

私がイスラエルを旅していたのは三月五日から一三日までの九日間。この期間は和平交渉中で、比較的安全な時期であった。少年のこの殺害事件は、昨年七月三年ぶりに再開された中東和平交渉が崩壊しかかっていた頃に起きた事件だったのである。

紛争地域のガザの面積は東京二三区の三分の一程。人口は一八〇万人。現在（八月一七日）の双方の死者はガザ地区のアラブ人が二千人。イスラエルが六七人。倒壊した家屋は一万七千棟にも及ぶ。避難民は五二万人とされ、人口の三分の一に当たる。犠牲になった人の中には国連が運営する学校に避難していた人たちもいた。

圧倒的な軍事力でガザ地区を破壊しつくすイスラエルにアメリカでもイスラエル寄りの政策に「ノー」の声が上がりはじめている。

「虐殺」、これは人類史上最悪の事態として第二次大戦時、ユダヤ人が身をもって体験し

てきたことである。イスラエルの建国と発展に力を注いできた人たちの中には、杉原の「命のビザ」で救われた人もいる。

これからパレスチナの地はどう変わっていくのだろうか。この事態を杉原が目にしたとしたら、私たちに何を語ってくれるだろうか。

八月一七日、東京新聞とＮＨＫＢＳの番組で、争いが続くパレスチナとイスラエル双方の若者たちのことが取り上げられていた。一つは双方の高校生がつくる混声合唱団「エルサレム・ユースコーラス」が来日し、平和を掲げる日本から世界に向けて祈りの歌を響かせるというもの。もう一つは八月四日から二週間にわたり、広島で双方の二〇代の若者たち二〇人が合宿生活をし、対話を通して理解を深め合う取り組みの紹介であった。

「憎しみを越えて、平和への道を探る」。これこそが苦悩の末「人道主義、博愛精神第一」という信念を貫き、ビザ発給を決断した杉原千畝が私たちに語り、伝えたい言葉なのではないだろうか。

追記

この原稿を書き終えた翌日の八月二六日、イスラエルとイスラム主義組織ハマスが停戦合意を発表した。軍事作戦を始めた七月八日から五十日目のことである。パレスチナ人の死者は二千百二十二人。その七割以上が民間人であった。イスラエル側の死者は民間人を含め六十八人とされる。（東京新聞・八月二六号）

参考図書

『六千人の命のビザ』　杉原幸子著
『杉原千畝の悲劇』　渡辺勝正著
『命のビザを繋いだ男』　山田純大著
『杉原千畝ガイドブック』　千畝ブリッジングプロジェクト制作

短歌

草場　弘子

散りつくすを確かめ枯葉手に寄せる鉄砲百合の芽を探りつつ

最低気温記録せる朝バス停の表情乏しき列に加わる

冬枯れのシモツケの枝にしばし居てめじろ飛び立つ光の二月

下車駅問う留守電ありて三月過ぐ誰と知らずもその人を待つ

ももぐみで拵(こしら)えてきた頬の傷二歳の論理で顛末かたる

志ん朝の「火焔太鼓」聞く夏の夜のことに想えり亡き人いくたり

白昼夢のごとし真夏の楠ゆアオスジアゲハ一斉に飛ぶ

客同士のトラブルによりとアナウンスありて電車は二分遅れる

内ふかく月夜茸（つきよだけ）一つ育てたき夜なり窓を開けば風が

「東京はアブラムシがいるから住みたくない」言いつついつか棲みつきにけり

移転先決まらぬままに煙吐く焼却場の高き煙突

ホームレス群がるが故に潰されし噴水ありき再開発の街

夏盛り産直野菜販売所「仕入品」も表示し細ぼそ商う

菜園の十四本の蜀黍(もろこし)をなべて倒して夏台風ゆく

風やむを待ちてゆっくり身をもたげ蜀黍畑受粉始める

後作(あとさく)に急かされいまだ花残るピーマン抜けば袖に露降る

食べ切ると覚悟出来れば菜園に秋大根を葉ごと抜き来る

金歯(きんば)剥いておばちゃん林檎の仲買いをしていた村は元気でありにき

植栽のハマナス乱れ咲かせつつ日本海に向く白き箱物

田を埋めてバイパス成れりまた一つ置き去りになる村落あるべし

チョウチョウジの声のみ渡る在所(さと)の墓所おんな三人老い嘆きあう

春までの除雪契約して義姉のひとり籠れるふるさとの家

除染して色彩消えし家並に一処明るしノウゼンカズラは

コンクリートの基礎を覆うと勢(いきお)える集落跡のただならぬ緑

日照雨(そばえ)降るふっこう広場に美容院五つ並びて簡素に開く

祖父ちゃん家(ち)町ごと流され我が四歳浜辺の遊び未だ知らずも

十八歳の私を乗せた常磐線まわりの夜行の尾灯消え果つ

電車みち漫(そぞ)ろに行けば引揚者上陸記念碑樹の下にあり

亡くしし児の襁褓(むつき)でありしとうワンピース平和祈念館に薄紅放つ

アラスカ鮭の銀鱗のうねり飽かず言う代用教員は復員兵なりき

からゆきさんの声が聞こえる

―秋元松代の戯曲から―

田島　すみ子

秋元松代という人

今年四月に新国立劇場で秋元松代の『マニラ瑞穂記』が上演された。

秋元松代は戦後五十年間にわたって、注目を浴びる戯曲作品を発表し続けた孤高の劇作家だ。私はそのエッセイにひかれてこの作家を読むようになった。表現に甘さがなく、的確で、かたく鋭い感じを受ける。ときに人と激しくぶつかることもあるが、それもこの作家の愛憎の深さの表れで、感動的でさえある。文章は清潔で緊張感があり、それが心地よい。そのようなエッセイは何ものにも代えられない魅力だった。そこから入って、戯曲にも関心を寄せてきた。

しかし、じつは芝居はほとんどみたことがない。今回「つむぐの会」の仲間に誘われ、久しぶりに芝居をみた。舞台でみると、戯曲として読んだときには印象に残らない場面が俳優の姿とともに印象に残り、

やっぱりよかったと思った。

とくに印象深かったのは、年老いて精神を病み、日本語も自分の名前も忘れてしまった老からゆきさんが、「日の丸」をみるとかすかな声で「君が代」をうたったことだ。彼女は、若い時に日本から東南アジアに連れてこられて、性をひさぐからゆきさんとして生きてきたが、老いて客をとれなくなると山奥の部落に買われて行った。「女房兼、牛の代わり馬の代わりに」。日本の領事館員に会わなければ殺されていた、「賤業婦のなれの果て」。シズと名づけられて領事館に暮らしている。

そのからゆきさんが「日の丸」をみると本能のように「君が代」をうたう。それほど強く「君が代」、「日の丸」、日本国が、彼女の内面に入っていた。身一つで東南アジアを流浪し、すべてを失くしたからゆきさんに、最後に残ったものがそれだったのだろうか。

秋元 松代（劇作家1911～2001年）

舞台のからゆきさんは目で見ることのできない内奥を体現しているように感じられた。作者はからゆきさんを書くからにはそこまで造型しなくてはすまなかったのだろう。国からも家族からも捨てられたからゆきさんが、自己の存在を証明するようにやっとの思いですがったものが、国へのアイデンティティだったとしたら、何とも切なくつらい思いがする。

秋元松代はからゆきさんが登場する戯曲を他にもいくつ

か書いている。『村岡伊平治伝』（一九六〇年）、『アディオス号の歌』（テレビドラマ版一九六八年、戯曲版一九七五年）。『マニラ瑞穂記』は一九六四年の作。女性の生きにくさをずっと書いてきた秋元のこと、からゆきさんはステレオタイプではなく血が通っている。よく評されるようにたくましく陽気な反面、神経を病んでいたり、深い絶望と虚無をひそませている。

秋元松代は一九一一年、明治四四年生まれ、戦争が終わったときは三四歳だった。二〇〇一（平成十三）年に九十歳で没した。秋元は、戦後の虚脱感の中で知人に連れられて劇作家三好十郎を訪ねたのがきっかけで、戯曲を書くようになった。第一作『軽塵』を三好主宰の戯曲研究会で発表したのは一九四六年。三好の絶賛を受けた。翌年には『礼服』を発表。どちらも家庭劇だが、「家」を背負う「長」としての責任感から、きょうだい親族に抑圧的になる兄と、その妹などとの行き違いや葛藤が描かれており、多分に自伝的要素が濃いといわれている。そのほかに、戦後の逼迫した農村で身売りから逃れて家を出た女性が売春下宿に行きつくという、女性の苦しみを描いた作品もある。そういうところでも自分を見失わず一生懸命な登場人物たちに共感を抱かずにはいられない。

そのような作品を書いてきた秋元はからゆきさんをどう描いているのか、もう少し細かく見てみたいと期待を込めた関心が湧いてきた。

からゆきさんたちは、人として、日本人として、女として、故郷から遠く離れた地で、帰る望みも断たれたまま、何を思いながら過ごしたのだろう。からゆきさんや性を売って生きざるを得ない女性たちに、作者はどう共感し、何を言わせているのだろう。作品はフィクションであるけれど、フィクションだから

こそ凝縮された真実が詰まっているのではないだろうか。

私たちの身近にも、戦後の立川やその周辺に性を売って生きた女性たちがいた。朝鮮戦争時の立川の米兵を相手とした女性たち。国立の「浄化運動」の対象とされた女性たち。彼女たちとどこでつながれるのかという問題は、私の数年来の「宿題」となっており、二度ほど本誌上で考えてきたが、これという確信をいま一つつかめていない。秋元のまなざしにそれを解くヒントがあるかもしれない。

もうひとつ、私は昨年、やはり本誌上で「島原の子守唄」の歌詞から、娘たちがからゆきさんとされていく過程をリアルにみてきた。秋元の戯曲ではからゆきさんの日常が描かれており、今度は日々の姿をうかがうことができるかもしれないという期待もある。厳しい現実にも人間らしく生きようとする女性たちを描いた秋元だから、作中のからゆきさん像も秋元らしいものに違いない。

今回は『マニラ瑞穂記』と『アディオス号の歌』によってみていくことにした。

怒るからゆきさん　『マニラ瑞穂記』から

『マニラ瑞穂記』は、一八九八（明治三一）年のマニラの日本帝国領事館が舞台となっている。あらすじは次のようなものだ。

領事館には、フィリピンの独立運動を支持する日本人志士やからゆきさんたちが、内乱で混乱する市井から避難していた。そんななか、日本領事・高崎のもとに、帰国したはずの秋岡伝次郎があらわれる。賤しい生業をしていても日本人の誇りを忘れず、愛国精神にのっとって行動する奇妙な男・秋

岡は、かつてシンガポールで女衒として名を馳せていた。高崎の忠告に改心を誓ったが、堅気の仕事も時の政治に邪魔をされ、再び南方へと流れ着いたのだった。

フィリピンをめぐり各国の思惑が見え隠れするなか、秋岡は志士たちの求めに応じパトロンとなる。しかし、アメリカ軍の勝利が伝えられ、秋岡は囚われの身となる。からゆきさんたちは、秋岡の「生まれ変わりたい」という願望を冷たく否定し、秋岡を自分たちと同じように落ちるところまで落ちよとなじって、共にアメリカの軍人に連れられて去っていく。(主に上演パンフレットから)

この芝居には大勢のからゆきさんが出てくるが、先に上げたシズのほかは若くて元気な女性たちだ。悲愴感やジメジメした感じはない。しかしそうかといって意志的に生きているわけでもなく、妙にあきらめた投げやりな感じがする。作品の舞台は、フィリピン独立運動の混乱を避けて日本人が避難したマニラ日本領事館。からゆきさんは先の見えない幽閉生活を持てあましている。

もん「こげんこたあもうたくさんたいね。早う終ってくれんかな。あたいらはスペインがどうなろうと、アメリカが負けようと、どっちでんかまやせんもんね。」

はま「そら、そうや。日本さえどうもなければ別に困らへんもんな。早ううちらが安気に働けるようにしてもらわな……」

こう思いながら過ごしている彼女たちは、「ときに目の前の男たちをからかい、誘惑し、酒に酔い、恋もするしたたかな強さ、なにもかもを笑い飛ばす覚悟を持っている。」(パンフレット)

からゆきさんの過酷な一生を表しているのはシズだ。若いからゆきさんもシズに自らの行く末を見たに違いないのだが、そんなことを嘆く彼女たちではない。いま、仕事ができることが大切なのだ。もんや、

はまのような考えは、後のことも先のことも、世の中のことも考えない、いわばその場その時主義で、すべてを投げているように見える。からゆきさんの一つの典型かもしれない。

その彼女たちが昂然と主張するシーンがある。失意の秋岡に対して彼女たちはさらに打撃を与えるようなことばを浴びせる。

秋岡「もしも生きらるっとなら、おれは生まれ変りたか。」

タキ「生まれ変りたかじゃと――ああた生れ変って何んになるとね。今からどげんしようと、ああたの生れ変るるもんじゃなか。」

くに「身勝手じゃ。われ一人よかなら、うちらをこげんとこへ置きざりか。こんところまで連れ出したんは誰とか。」

タキ「くにしゃんの云う通りじゃ。ああたはうちらと同じとこにおらにゃならん。――旦那しゃん。こん領事館はよそん世界でっしゅう。ああたはよそん世界の人らの口真似ばしとるんじゃ。ああたん心がどげん心か、うちらん方がよう知っとっと。さ、うちらと一緒に早う逃げまっしゅう。」

はま「あてらはもう、とうに破滅しとるんやで。これより先きへは落ちられんとこへ落ちとるのや。あてらを放かして高あいところへ坐る気ィやろ。ほしてあてらを虫けら呼ばわりするのやろ。」

もん「そん男は人殺しじゃ。死ね！お前が死ねばよか！こん人でなしは、人間よりも偉かもんの気でおっと。神様んごたる気でおっと。」

秋岡とからゆきさんの、主人と雇われる者の関係が、完全に入れ替わっている。投げやりに見える彼女たちの中に、どれほどの覚悟があるのかが、恐ろしいまでに言い表されている。

彼女たちは、若く幼いときに売られ買われて、遠くフィリピンまで連れてこられ働かされた。故郷にも、家族のもとにも帰るに帰れない。先々この地に埋もれていくしかないことを心のどこかでわかっている。そのような境涯に導いた元凶の秋岡が、「生まれ変わりたい」とは。笑止千万。というより殺してしまいたいほどの怒りを抱く。秋岡の、いわば「真人間復帰願望」に対する彼女たちの怒りは、日頃の態度からは想像できないほど激しい。

そこには「こちらの世界」に来てしまった自分の身の上へのあきらめと悲しみ、どうしようもない不安がにじみ出ている。自分たちは、領事館のような「よその世界」、普通の世界には帰りようがない。それでもこれからも生きていくしかない。自分たちを苦界に追い込んだ秋岡が逃亡することなど許されないことだ。同じ苦界に沈んでもらうしかない。そういう気迫がこもっている。

からゆきさんは、自分たちはとうに破滅している、これより先はない所へ落ちている、と言う。これまでの半生はとても肯定できないけれど、からゆきさんになる以前の世界に生まれ変わることもできないと言う。行くことも

できないし、帰ることもできない。そのことばには出口のない覚悟が感じられる。

からゆきさんという救いのない世界にこのような形で主張する彼女たち。彼女たちは秋元松代によってことばを与えられ、人間として生かされた。そのように見てくると、私の内にもあたたかい気持ちが湧いてくる。

帰ってきたからゆきさん　『アディオス号の歌』から

『アディオス号の歌』は現代の九州天草が舞台となった次のような作品だ。

地方からの集団就職で都会に出てきた美根と四郎は、日本脱出をはかるために八年かけてヨット・アディオス号を完成させ外洋進出を目指したが、天草で座礁する。そこで二人が出会う千々岩たまは七十歳。十六歳でからゆきさんとなったが、やさしい恋人に送られて故郷へ帰り、小さな旅館を営む。同業の女性が産んだ混血の娘・亜里州（二十歳）を小さいときから孫のように育ててきた。座礁した二人はたまの旅館に泊まりながらヨットを修理し、出発を待っている。しかし四郎は亜里州の作る土器の粘土の匂いにひかれて航海を断念し、生まれた東北の地へ帰るという。美根は一人で出航を決意する。走り出したヨットにはたまも同乗し、たまの恋人が暮らすフィリピンをめざす。

ここに登場するのは、幸運にもフィリピンから帰国した元からゆきさん、千々岩たま。帰国できたのは、現地で巡り合ったやさしい恋人がたまの行く末を思って日本へ送りかえしてくれたからだ。その頃は金持ちだった彼は、いまひどく落ちぶれてマニラの老人施設にいる。たまは彼への感謝を忘れず、あふ

れる思いを手紙にしたためている。

たまは、からゆきさんとしてはたいへんまれな例だろう。帰国できたことが稀有なことだし、その後も困窮することなく生活しているし、外国語で手紙を書くほどに知識がある。このようなからゆきさんがいたのかと疑問が湧くけれど、それは作者の創作ではなく天草の旅で原型となる女性に会ったのだという。その女性は明治三八（一九〇五）年、十六歳でサイゴンに渡った。その後スマトラへ移り、現地のオランダ人の内妻になった。彼は彼女を丁重に扱ってくれた。昭和七（一九三二）年、夫とともに帰国し十一ヵ月共に過ごしたが、夫は国に帰り自身は残ることになった。（エッセイ「アディオス号の歌」、「天草と知多とジャズ喫茶――『アディオス号の歌』について」）作者は天草でこのような女性と出会い、作中人物の原型を得たという。

こうして生まれた作中のたまは、四郎と美根への心配りや亜里州への思いがとてもやさしい。ひょうひょうと暮らしていて、思慮のある気持ちの良い女性として描かれている。その彼女が心の奥にどんな思いを抱いているか、口にする場面がある。亜里州が四郎と会っていたということを亜里州から聞きだしたときだ。

たま「わたしは、お前を乳呑児んときかるもろうて、人手にかけんと育ててきよった。血は他人だばって、ほんな孫娘とばし思うてきたばい。お前の母や、わたしんごたる女にゃしとうなかと思うちょたたい。」

亜里州はいたたまれなくなって家を出ると告げる。

たま「ほうか――。お前の心のままにしなはァ。ばって自由に、美しゅう生きてはいよ。」

こうして亜里州を送り出す潔さにも驚くが、「お前を、お前の母や私のような女にはしたくない」ということばに打たれる。自身の一生を冷静にみている。からゆきさんの仕事は苦界だった、自分はそういう仕事をしてきた、しかし亜里州にはそういう目に合ってほしくない、と思っている。つらかった自分の来し方をこのようにとらえる、自分を否定的に客観視する姿に敬服する。

さらに、四郎と別れた美根がヨットを出すときに、乗り込んだたまはいう。

たま「女ちゅうもんは、生まれたとこでは死なれんもんたい。どこぞへ出ていかにゃならんごつ生まれついちょるたいね。」

こういいながら、たまは歌う。

「あの日の　あの時　あの町の
あの甘い風の夜に
マロニエの白い花が散り
……」

作者は、この戯曲に登場する女性たちには「女の宿命としての漂泊性」が共通していると書いている。さらに天草の地理や風土、出稼ぎの歴史に触れ、次のように書く。

「天草の海岸へ立ってみると、広漠とした水平線のさきは中国大陸であり南洋の島々である。この土地の人々にとって、そこは大阪や東京よりは、ずっと親近感のあるところなのである。悲壮感や暗い感じでなく、体ひとつを資本に外地へ働きに出る外向性の天草の女たちをもっと知りたくなった。」

（エッセイ「天草と知多とジャズ喫茶――『アディオス号の歌』について」）

「出稼ぎの歴史は古くから行われている。それは貧困が大きな理由ではあるが、人間はかならずしも金銭のためだけで流離の生活を始めはしない。そこから現状脱出を意欲する人間像というものへ私の関心が集約されて行った。」（同）

からゆきさんはただ売られ、買われて行っただけではなかった。茫洋とした海に誘われるように、遠い、広い、新しい場所へ脱出して行ったのだった。それは作者のロマンとも見えるのだが、海を渡った女たちにそのような思いがなかったとは言いきれないだろう。

この作品では、千々岩たまという元からゆきさんの人物像はかなり具体的だ。たまはからゆきさんとなって苦界を経験したが、巡り合った男性によって幸運にも解放された。いまでも彼女はその苦しかった経験と救われた経緯を忘れることはない。消してしまおう、隠しておこうとは考えない。たまは人間としての尊厳を忘れない開放的な気高い女性像となっている。

運命とたたかう

ここでみてきた二作品は、からゆきさんを描くために書かれたものではない。だから作中にからゆきさん像を求めるという読み方は作者に迷惑かもしれないという気持ちも、私のどこかにある。しかし作者はこれだけ雄弁にからゆきさんに語らせているのだから、許してもらうことにしよう。

からゆきさんというと、まず悲惨ということばを思い浮かべる。冒頭のシズに表されるように彼女たちを悲惨な先行きが待っている。牛馬のように扱われ、ことばも精神も失くしてしまう。『マニラ瑞穂記』

ではからゆきさん自身が、将来ではなくすでに現在もどん底まで落ちていると言っている。このように秋元は悲惨さを正面から書いている。

秋元作品のすごいところは、私たちが悲惨ということばで思考をストップさせてしまうその先を、からゆきさんに憎悪や自嘲やあきらめのことばを話させ、人間として生かしたところだ。『アディオス号の歌』では、奈落を経験しながら救われて故郷に帰った元からゆきさんが、経験を糧として、やさしい情を抱きながら生きている。

秋元松代の描くからゆきさんはやはり前を向いて生きていた。それをたくましいといっては単純すぎるだろう。二作品に共通していたのは、からゆきさんが自分から逃げないで自身を直視する自己認識と、そこから逃れようがないという覚悟、それを引き受けながら生きていこうとするつよさだった。自分をみつめるのは、彼女たちほどの苦しみをかかえていなくてもつらいものだ。からゆきさんの中に精神を病む者がいることからもそれはわかる。そういう中での彼女たちの覚悟なのだ。

このようにみてくると、この作者の根底には、人はどこへ行っても、どんな目にあっても、人間らしく生きようとするものだという前向きな人間観がある。絶望的な暮らしの中でからゆきさんが口にするエネルギッシュなことばは、それがののしることばであっても作者の期待の表れといえるだろう。『アディオス号の歌』の千々岩たまは、故郷に落ち着くこともできないで波の上に乗り出すのだが、悲壮感はなく虚無的な明るさをもつ。これはどちらも、彼女たちの底に流れる生命力がなさしめるものではないだろうか。

秋元松代は明治期の海外出稼ぎ者について次のように書いている。

「明治の開国の後、大急ぎで欧米の先進国に追いつかなければならなかった日本は、国家としては、弱体だったがまだ若々しく、国民にもめくら馬のような奔放な生命力があった。それと日本の国土の貧しさというものが結びつき、男たちばかりでなく若い娘たちまで海外雄飛という合言葉のほかは何も持たずに、大陸へ南方へと押し出して行った。むろん彼らのほとんどは貧しく、その貧しい生活からさえはみ出してしまった人たちだった。伊平治もやはりその一人である。彼らは国家から何の保護も援助も与えられない流浪者に等しい群衆だった。」（エッセイ「この人間像にめぐりあった喜び」）

村岡伊平治について述べた文だが、からゆきさんもそうだった。明治という新しい時代の波に乗せられるように、人びとは奔放な生命力にあふれ、何の保証もないままに海外雄飛を合言葉に飛び出して行った。それは貧しさから逃れるためであったが、底辺に生まれた運命とたたかう民衆の生命力のたくましさでもあった。

からゆきさん個々の生は厳しく貧しいものであったとしても、作者は彼女たちの中に時代のエネルギーを感じ取り、人が本来備えている生きようとする意志を合わせもたせて、一人一人の顔をもつ作中のからゆきさんを生み出していったのだろう。

からゆきさんへの作者のまなざしはあたたかい。しかし、作品では彼女たちが救われる道筋は描かれない。戯曲は人間を描くもので、直截的に問題を解決しようとするものではないから。そして救うことができるほどに簡単なことではないから。そうではあるが、秋元はからゆきさんを、苦境の中でも生命力を失わない人たちとして描いた。彼女たちのことばに、生き方に、読む者は目を開かれる思いがする。そこ

に生まれる共感こそ問題解決の出発点となるだろう。

自ら声を上げ、明日も生きようとするからゆきさんたちは、現代の私たちに、あきらめてはいけない、希望を捨ててはいけない、と呼びかけているような気がする。

秋元松代の作品は読む者に、人への共感や期待を持たせてくれる。今回は芝居をきっかけに戯曲を読みなおしていろいろな収穫があったが、ほかの作品もつぶさにみていくと深い世界が広がっていることだろう。これからも読み続けていきたいと思う。（二〇一四年十月）

参考図書

『秋元松代全集』第二巻、第三巻、第五巻（筑摩書房　二〇〇二年）

「マニラ瑞穂記」（上演パンフレット　新国立劇場　二〇一四年）

故郷の小学校が閉校になった

―少子化の流れのなかで―

町田　輝子

私の卒業した小学校が今年三月に閉校された。

故郷は茨城県の県南にある稲敷市柴崎で、穀倉地帯の中の農村地域である。一九九六（平成八）年の町制施行で新利根町が他の町村と合併して稲敷市となった。

大きく「市」となって十八年になるが柴崎、太田、根本の三地区にあった小学校が一つの小学校になるのは、少子化による生徒数の減少と、それぞれの学校が耐震基準に合った建物ではないので、災害時に使用出来ないことが理由として、閉校記念の冊子『せんだん』に載っていた。新しい小学校は新利根中学校の敷地の中に建設された、離れた地区の学童はスクールバス通学になる。校舎の完成が遅れて、九月の新学期から新しい新利根小学校で授業がはじまった。新築の校舎を目にすると、私の過ごした木造小学校が懐かしく思い出される。

しかし、初めて会う子供達が新しい環境で学ぶことはお互いに良い刺激になるだろうとも思う。

冊子『せんだん』は柴崎小学校を卒業した代表者が閉校の記念としてつくり、全戸に配布したものである。開いて見ると木造校舎の写真が載せてあった。それを見ると自分の小学生時代が浮かんできた。

一年生の教室は校長室のとなりで、二年生の教室はこちらの角だと思いだし、三年〜六年生と学んだ教室を写真のうえを追っていた。校舎は四十五年前に鉄筋校舎に建て替えられている。しかし、私の小学校は昔の木造校舎である。卒業してから六十二年が過ぎていたが、私は全く小学校のことなど思い出しもしなかった。同窓会の通知がきて、小・中学校が同じ同級生なので、その時に皆がどうしているかなと思うくらいであった。

あらためて小学校時代を振り返ると、一九五二（昭和二七）年から一九五八（昭和三三）年までの六年間をすごした、木造校舎の暖かい風景とともに、当時の思い出が胸に残っているのだ。

入学式に着ていた赤いワンピースや、一年の夏休みに「七五三」のために母親が髪の毛にパーマもかけてくれたこと。パーマは私一人だったので恥ずかしさと誇らしさを少し感じてた。「七五三」の写真にパーマの髪にリボンをつけた着物姿が写ってる。

一年生の担任だった中島先生はまるい丸顔に丸いメガネをかけていた。いつもメガネをハンカチでふいて、メガネはピカピカにひかっていた。

二年生の教室は西側の角で大きなさくらの木が側にあった。枝が張り出しているので春には花びらが吹きこんできた。四年生まで西側の校舎であったが、5・6年生は東側の校舎になる。せんだんの大木が東西の校舎に沿ってならんで植えられていた。夏の季節には木陰になり涼しい風をはこんでくれた。代々の卒業生の心に見事なせんだんの大木は思い出として残っていたので閉校記念の冊子の名前も「せんだん」になったのだろう。

筆者（後列右端）が1年生の頃。

小学生時代、一番嫌いだったのは便所掃除であった。三年生になると掃除が増えたのだ。いま使われている水洗トイレではないのでくさい臭いに我慢がならなかった。鼻をつまんで分担の便所を急いで掃除していた。今から考えると、きれいになっているはずがなかった。トイレの神様は怒っていただろう。四年生の便所ではトイレの怪談話が噂になっていて、くさい臭いはふきとんでこわごわと掃除をしていた。五・

六年生になると便所は少し丁寧に掃除をしていた。先生方も同じ便所を使用していたからだ。

私の子供達の小学生時代は、トイレ掃除は子供達はやらないで、専門の人が来ていたようだ。三十年前の立川市の小学校である。掃除させることが良いか悪いかわからないが、掃除の価値観が時代とともに変化しているようだ。

私の通った柴崎小学校正門の側に大きな石碑があった。私達は遊び場としかみていなかったが、『新利根村史』でその由来を知ることになった。小学校の創立に貢献した方を顕彰した石碑であった。

明治政府の一八七二（明治五）年の学制発布「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」の方針により小学校制度が創設された。柴崎小学校は一八七六（明治九）年東光寺を校舎として開校する。一八八一（明治一四）年、現在地に木造茅葺き「ユ」字型の校舎が新築された。明治に開校して一三八年の歴史がある。その建設の時に、土地と資金の提供した平井文右ヱ門、染谷五右ヱ門二人の功績が大きいと記載してある。その一人の平井翁が物心両面での功績が大きく頌徳碑が建てられたということだった。その時代は小さな貧しい農村であったが教育に熱心だった。そして今は住民に教師が多い地域である。

子供時代はなんにも考えずに過ごしていたが、いまさらながら幸せな時間が流れていた事を知る。セピア色の六年間は鮮やかに彩られて目のまえに現れてくる。

私は運動が大の苦手であった。鉄棒の逆上がりができなくて、校庭の南側にある鉄棒で放課後、一生懸命練習していた。一週間かかってできた時の感激をわすれていない。両手の掌に豆ができて痛くなっていた。その根性はいまはもっていない。

校庭でもう一つ思い出すのは寒い季節になると、校庭の端から端まで使って鬼ごっこをしたことだ。男の子も女の子も一緒に走りまわっていた。鬼に捕まって長い長い行列をつくっていた光景が浮かんでくる。その遊びを教室の窓から眺めて笑っていた、4年生の担任だった宮崎先生がいた。

遠足は春と秋にあった、春は近くのさくらの名所に行き、秋の遠足は山にきのこ刈りである。初茸・ぬるりんぼう・ほうき茸などを取った。途中で山栗や椎の実など木の実を拾い集めてよろこんでいた。自分で取った茸を家に持ち帰り、母が茸汁を作ってくれ夕食に食べたことを覚えている。

小使い室では小柄な日置さんが、割烹着姿で大きなかまどで湯をわかして、いつも忙しそうに働いていた。始業と終業の鐘をならすのが小使いさんの仕事で、その姿はやはり卒業生の誰もが忘れないで、今も覚えている姿である。

小使い室のそばに池があり金魚・鮒・鯉が泳いでいた。鮒と鯉は誰かが釣ってきてはなしたのだろう。金魚は小使いさんが買って来たものかもしれない。池の側の青桐の葉が散る頃

は、小使いさんが小さな身体で落葉を掃き集めていた。

次々と浮かんでくるが、放課後に校庭で遊んでいた楽しいことばかり。あの頃はのどかだった。現在は小学生から学習塾にかよって、親も子供も大変である。

また校長室や音楽室は独特の雰囲気があった。掃除のために出入りしていたが、掃除の時は校長先生はいなかったので、大きな机と回転する椅子があり、椅子をクルクル回して遊びながら気楽にできた。音楽室はベートベン、モーツアルトなどの音楽家の写真が壁に飾られていて、怖い顔・優しい顔とみんなで言いながら掃除をしていた。ピアノやオルガンが置いてあり、でたらめに弾いていた。しかし、図書室はなかった。教室に少し物語や童話、動物図鑑などが棚に置いてあった気がする。中学校で初めて図書室を体験した。

五・六年生になると東側の校舎になった。この校舎は学校行事のたびに教室の仕切りをはずして、机を廊下に運んで積んでいた。会場設営は大変だが、いつもと違う教室になると気持ちが弾んだ。広くなった教室の掃除は一列になって雑巾がけをし

た。学芸会、入学・卒業式などの行事の度にである。

秋の運動会、私は走ることが遅く苦手であった。運動の得意な人は楽しそうだった。家族がお弁当持参で見物するのはあたりまえであった。学校の側の道路には屋台が出て、さらにお祭り気分になった。これは私が中学生になっても運動会には屋台がでていた。いつの時代まで続いていたのだろうか。

さまざまな行事の思い出がつまった柴崎小学校の閉校に、私は寂しさと悲しさを感じる。絶対に学校がなくなるとは考えもしなかったし、思いもしなかった。いまは帰っても閉校した柴崎小学校を見に行くことも近寄ることも考えてない。この気持ちは故郷から長年離れていたので余計に感じるのだろうか。

地元の同級生達も寂しいと思っている。話してみるとクラスの様子や担任の先生の話題がどんどんでてくる、あの教室の前であったことや、校舎の端ずれで遊んだことなど、話が広がってくるのだ。

記憶といえば「一九五五（昭和三〇）年に校庭の南側に校舎増築する」と、『新利根村史』に記載されていたが、私はその建設工事に覚えがない。兄にも聞いたが覚えがないというし、同級生も記憶がないという。だが三級下の近所の友人は六年生の時、その教室だったという。やはり私が在校していた時に、校舎は増築されていたのだ。私の頭からスッポリとぬけているのだ。必死に考えてみると、かすかに南側空き地に工事の柵が作られていたことが浮かん

できた。

閉校された後の校舎はどうするのか、先日帰った時に近所に住む市議会議員に聞いてみた。これからは地元が管理することになり、管理費も年間最低二百万円の出費になるという。経費がかからない管理の仕方がないか、考え中のようだ。東京のある大学から耐震工事をするので、貸してほしいという問い合わせが来ているという。もうひとつ、障害者養護の学校からも問い合わせが来ているという。行政との話し合いでは、教育関係の施設が良いのではないかと、その方向で進めることを考えていると話してくれた。

私の心にある柴崎小学校は一九六六（昭四四）年、鉄筋校舎に建て替えになったときに、本当は終わっていたのかもしれない。

三つの小学校が統合した新利根小学校の校庭では、元気に遊んでいる子供たちの姿が見られる、新しい時代を作ってゆく大きな力であり、大切な礎の宝になるのだろうと思っている。

〈参考〉

新利根村史（三）　昭和五九年三月刊　村史編集委員会

「せんだん　～稲敷市立柴崎小学校閉校記念～」平成二六年三月　柴崎小学校閉校実行委員会

女たちの〈解放〉への欲求をくみ上げた「国防婦人会」

―市井の女たちの戦争協力―

女性史・ジェンダー史研究者　加納　実紀代

２０１４年７月６日、「ギャラリー茶遊」・「つむぐの会」共催で、加納実紀代さんをお招きし「今の社会、女から見ると」と題してトークの会を開きました。その時の記録です。

加納実紀代さん（於：ギャラリー茶遊）

女子教育問題の季刊雑誌『女も男も』が、最近「歴史に学ぶ　戦時体制はいかにつくられたか」という特集をやりまして、その中に私が書いた文章が、今日皆様にお配りしたものです。今日の話はその文章のタイトルをそのままいただきました。現在の状況を一九三〇年代と照らし合わせながら、いっしょに考えていただきたいということです。

本論に入る前に、今回お声をかけていただいたのを機会に立川との関係を思い起こしてみました。

立川の方々にはずいぶんお世話になったのですが、いつからどういうお付き合いだったかというと一九八〇年からなんです。私が人前で話をする、最初ぐらいの機会を与えていただいたのではないかと思います。私がこういう研究を始めたのは七三年からなのですが、その後、仲間といっしょに研究会「女たちの現在（いま）を問う会」を作って『銃後史ノート』という機関誌を出しました。その過程で雑誌に書いたり、『女性と天皇制』という最初の本をまとめたのが七九年で、その直後あたりに立川の中央公民館からお声をかけてくださったのだと思います。その後二年か三年、毎週通いました。未熟な講師でしたが、そのなかで育てていただきました。

確か「女性問題講座」というタイトルだったと思います。当時は「女性問題」というと、「あなたんち、なんか問題があるの？」と、亭主が浮気でもしているんじゃないかという風にみられた。ですから先日問題になった都議会での女性議員に対するセクハラ野次、その頃なんて男性は言いたい放題、浴びせ放題です。そうした男性の体質は依然として変わっていませんが、それが今回は一応社会問題化し、メディアも取り上げざるをえなかった。やはり時代は動いたなという気がします。わたしはまだ動く前に立川に関わったのですが、その後、「つむぐ」の方々とも出会って、勉強させていただきました。ほんとうに私は立川に育てていただいたんだと、つくづくと感じております。

女性がなぜあの戦争を支えることになったかを視る「銃後史」

それでは本論に入ります。私がやってきたのは「銃後史」という、今では岩波の『女性学事典』にも一項目として取り上げられていますが、私たちがつくった言葉です。「銃後史」とは銃後の歴史

ということ。では「銃後」とは何かということですが、手っ取り早く言えば、戦争の後方支援活動、あるいはそのための場ということです。直接戦闘行為を行うのは男性である、だけど戦争というのは兵隊さんがいればできるものではない。とくに近代、二〇世紀になってからの戦争は、膨大な後方支援の体制がないと戦争はできないのです。だから総力戦という言い方がなされます。とにかく兵隊だけではだめなんです。兵隊が持つ鉄砲、武器、弾薬、乗せる戦車、飛行機、軍艦、そういうものの生産体制がなければ戦争はできない。では、男は兵隊になるとして、そうした生産は誰がになうのか。もちろん最初は男性が軍需工場で働いているわけですけれども、だんだんそういう男性も兵隊にとられていってしまう、結局最後は女性の肩にかかってくるわけです。それだけでなく、総力戦においては思想戦、兵士たちの戦意高揚も重要ですが、それも女性の役割でした。そういうことで女性に対して「銃後の守り」、「銃後の務め」がいわれ、「銃後の女、頑張れ！」となるわけです。

では、その戦争はどういう戦争であったか。いま日本の戦争はアジア解放の正義の戦争であったという勢力が強くなっていますが、これはどう考えても侵略戦争であったと思います。今回対象とするのは一九三一年から始まり、四五年に敗戦で終わる、いわゆる一五年戦争です。明治維新以後、戦争と名のつくものはまず日清戦争（一八九四～九五年）、その十年後に日露戦争（一九〇四～〇五年）、その十年後に第一次世界大戦（一九一四～一八年）。今年はちょうど第一次世界大戦開戦一〇〇周年です。七月二八日が開戦日ですから、あと二〇日ほどすると、一〇〇周年記念で、ヨーロッパでは大きな行事が行われます。第一次世界大戦は現在の世界体制を作る上で大きなきっかけとな

りました。その時は日本も連合国側で、戦勝国になっています。だから日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦と十年ごとに戦争をして、その度に勝った勝ったということで、国民の間に世界の「一等国」気分が広がってゆきます。

その後ちょっとあいて、一九四一年のアジア太平洋戦争。当時は「大東亜戦争」です。戦争と名のつくものはこの四回ですが、しかし軍事行動は明治以来一五回ぐらいやっています。それも全部日本が海外派兵をしている。日本が攻められたわけではないのです。今の安倍政権による集団的自衛権問題では、集団的自衛権の発動は「我が国の存立が脅かされる事態」とか言っています。そういうことはめったにあるものではないからいいんじゃないかとつい思ってしまうのですが、歴史を振り返ると、明治以来の海外派兵で攻め込んでいく時も常に「自衛のため」なんです。アジア太平洋戦争でハワイの真珠湾を攻撃したときも、開戦の詔勅には「自存自衛」のためと書かれています。実はアジア太平洋戦争は真珠湾から始まったというのは嘘で、マレーシアのコタバルへの攻撃の方が一時間一五分早いのです。それはともかく日本がさきに攻撃したにもかかわらず、これをやらなければ日本が守れないという口実で始めたのですから、集団的自衛権で、自衛なんだから大丈夫といわれてもゆめゆめ信じてはならない。そしてそういう侵略戦争を女性たちも支えた。女性は戦争の単なる被害者ではないということを直視し、なぜ平和を願うはずの女性たちが侵略戦争を支えてしまったのか。それを明らかにするのが「銃後史」です。

今、「戦争体験」として語られている多くは「敗戦体験」

毎年八月になるとメディアで戦争体験で語られますが、多くの場合空襲体験であったり、原爆体験であったり、疎開をして大変だったとかです。それぞれ本当に貴重な体験でその継承は大切ですが、それらは戦争体験というより敗戦体験ではないか。そこで語られているのは一九四五年の敗戦間際、あるいは満州からの引揚げとかは敗戦以後のことです。敗戦前後の体験を戦争体験というわけですが、戦争というのはいきなり空襲から始まるわけではない。その前段階があってじわじわっと来ているわけです。それを含めて戦争体験として語らないと、次の戦争を抑止する力にならないと私は思っています。

いま若い人たちに、集団的自衛権というのはあなたたちの問題なんだと一生懸命にいっても、どうもピンとこない感じです。「そんなの来るはずないよ」と。それは戦争といえば空襲とか疎開とかを考えるからではないでしょうか。戦争というのは、とくに日本の場合は最後の段階になるまで戦場は国外です。だからいきなり空襲体験から始まったわけではない。それどころかある段階までは戦争は結構楽しいんですよ、怖いことに。楽しいというと語弊がありますが、戦争には国民としての一体感とか解放感がある。だからうかうかと乗せられてしまうんです。そういうところも含めて明らかにしていかなければ、勝った勝ったといい気になっているうちに、気がついたら空から爆弾が降ってくるということになる。ということで、今日は銃後史として仲間たちをいっしょに研究してきたことを、お話させていただきます。

「一五年戦争」という考え方

一応「一五年戦争」の流れをざっと見ておきます。スライドに書いてあることを辿りながら説明しますと、最初の一九二六年一二月二五日、これは直接「一五年戦争」とは関係ないのですが、立川との縁で印象が強いので書きました。一二月二五日夜中の午前一時半ごろ大正天皇が亡くなって、そこから昭和になるわけですが、昭和元年は一二月三一日までの一週間しかありません。だから昭和元年生まれというのは希少な存在で「昭和元年の会」というのがありました。いまではそういう方もだんだんいらっしゃらなくなっていますが。

なぜ立川かというと、立川に三田花店という花屋さんがありますが、そのご主人の三田鶴吉さんにお話を伺ったことがあります。三田さんのお話では昔倒産したことがあると。なんで倒産かというと一九二六年、つまり大正一五年一二月に、お正月の門松用の松を奥多摩からいっぱい切り出して準備していた。ところが二五日に天皇が亡くなったので、門松立ててめでたいなんてとんでもないということになりました。それで三田さんの花店はせっかく仕入れた松を全部廃棄しなくてはいけなくなって倒産、彼はどこかに丁稚奉公に行ったそうです。なるほど天皇の死というのは、そんなふうに下々に大きな影響を与えるのだとつよく記憶に残っています。

いまBSテレビに「昭和は輝いていた」という武田鉄矢のレギュラー番組がありますが、昭和というのは輝いていたどころではない。前半は大変な不況と大戦争で、何百万の人が亡くなっています。戦後の高度経済成長の時期だけ取り上げて、平成の今と比べて「昭和は輝いていた」というのは、まさに歴史の改ざんだと私は思います。

昭和が幕開けした途端、金融恐慌が始まります。その上に二九年にはニューヨークのウォール街

で株が大暴落して世界恐慌が始まります。日本にも波及して、一九三〇年代初めはものすごい不況です。とりわけ三〇年から三二年の三年間は厳しい不況だったので、「昭和恐慌」と名づけています。そういうさなかの三一年九月、満州、いま中国の東北部ですが、そこの奉天（現在の瀋陽）近くの柳条湖で、日本が日露戦争でロシアから取り上げて管轄していた満鉄線という鉄道線路が、中国の軍によって爆破されるという事件が起ります（柳条湖事件）。しかし中国軍によって爆破されたというのはウソで、爆破は中国を攻撃する口実をつくるための関東軍の自作自演でした。にもかかわらず「中国がやったけしからん」と言って攻撃していわゆる満州事変が始まります。「一五年戦争」という考え方は、ここから一九四五年の八月まで、戦争というものはひとつながりに続いているんだという考え方です。

三一年から四五年までだから正確には一四年たらずですが、足かけで数えて「一五年戦争」です。一九四一年一二月八日の真珠湾攻撃から戦争が始まったという認識が一般的なのですが、そうすると戦争はたった四年ぐらいになる。しかしそれでは真珠湾の原因もわかりません。最近の若い歴史学者は「一五年戦争」をあまり使わなくなっていますが、私は歴史の流れの認識として正しいと思いますし、とくに女性の戦争への関わりを考える上では、「一五年戦争」という考え方は有効だと思います。したがって戦争の始まりは一九三一年ということになります。それはなぜ、どういうものだったのか？　また、それに比べて現在はどうなのかというところを、皆さんと一緒に考えていければと思います。

一九三〇年代の前半と後半ではかなり様相がちがいます。前半に戦争が始まるわけですが、まだ

戦争という認識が一般には弱いですね。それどころかエロ・グロ・ナンセンスとか三S、三ロ時代とか言って浮かれております。その一方、先ほども申し上げたように昭和恐慌といわれる大不況があります。そうした状況の中で今申し上げた「一五年戦争」のきっかけとなった関東軍による軍事行動、満鉄線爆破事件（柳条湖事件）がおこり、翌年かいらい国家「満州国」が建国されるわけです。それと同時に、国内に軍国主義、ファシズムといわれるような全体主義的な空気が蔓延していきます。これは日本だけではなく世界的にもそうで、ドイツのナチスが政権を取るのが一九三三年、ドイツが第二次世界大戦に入るのは一九三九年からです。ファシズムの語源となったイタリアのファッショ党は、すでに二〇年代はじめに政権についています。そうした独・伊のファシズム国家とやがて日本は同盟を結んで枢軸国となり、第二次世界大戦で連合国と対決するわけです。一九三〇年代前半は日本だけでなく、世界的にファシズムの嵐、軍事主義、軍国主義の嵐が徐々に高まっています。

後半になるとそれが具体的に戦時体制になってくる。一九三六年には二・二六事件による軍事クーデターが起きます。同時に朝日新聞社が襲撃されたということがあり、メディアは怖くて真実を書かなくなる。そうなると国民は国家に都合のいい情報しか受け取れなくなってくるわけです。三七年七月七日の盧溝橋事件をきっかけに中国との全面戦争が開始される。明日が盧溝橋事件七七年ですが、日本のメディアがそれを報じるかどうか。ここから日本はあの広大な中国大陸の奥深くどんどん軍を送り込んで、その結果として真珠湾攻撃という形で世界を相手に大戦争をすることになるわけです。

「エロ・グロ・ナンセンス」と「三S・三ロ」時代

立川関係の新聞記事が出てきたので、紹介します。これは一九二九年ですが、「立川に省電開通」。今のＪＲですが、省電と言っていたのですね。ＪＲの前が国電、その前は鉄道省が経営していたので省電と言いました。それまで中央線が立川まで来ていなかったのですね。それがやっと開通して駅も開設されて、町ではポンポン狼煙をあげて喜んでいるという記事です。

さて、さっき申し上げた三〇年代前半の非常に浮かれ調子として、エロ・グロ・ナンセンスと言います。エロ・グロ・ナンセンスというのは、エロチックな文化が栄え、グロテスクな事件が起こり、ナンセンスなバカ話が受けるということです。たとえばグロでいえば、「もらい子殺し事件」があります。当時は妊娠中絶はご法度ですから、女性は望まぬ妊娠をしても否応なしに産まざるを得ない。男は無責任に逃げてしまうということがあって、子どもを産んだものの育てることができない。それで養育費を付けて子どもを預けるわけですが、悪い養い親が養育費だけとってミルクも与えず死なせてしまった。押入れから白骨化した赤ん坊の死体が四一体も出てきたという陰惨な事件です。

それから、神奈川県の大磯で心中死体が発見され、町営墓地に仮埋葬しておいた。それ自体はよくある心中事件ですが、家族が遺体を引き取りに来たら、なんと女性の死体が消えていたというので、俄然グロ事件となりました。墓守の男が、きれいな若い女性の死体を自分の家に運んで大事にしていたという気持ちの悪い話ですが、それが「天国に結ぶ恋」というタイトルで映画になるとい

う事件もありました。ナンセンスというのは、榎本健一の浅草カジノ・フォーリーとか、いまで言うと吉本新喜劇みたいなところが盛んで、ナンセンス漫画が流行ったりしていました。

三S・三ロというのもこの時代を表す言葉です。三Sというのは、スポーツ・セックス・スクリーン。その三つのSが若者の間で流行りました。スクリーンというのは映画のことで、今は映画は斜陽ですが、当時映画は最先端。ちょうどトーキーが始まって、それまでの無声映画から音がでるようになったということでものすごく人気があったのです。三ロというのは、エロ・グロ・テロです。テロも非常に頻発します。総理大臣浜口雄幸が狙撃されたり、今みたいに脱法ハーブを飲んで車を走らせて一般市民を傷つけるというのではなく、はっきりと権力者に向けて銃を撃つというテロも頻発します。その流れで三二年に五・一五事件が起きる。その一方、銀座なんかでは非常におしゃれな男女、モボ（モダンボーイ）とかモガ（モダンガール）が出現してカフェが繁盛している。都会では三S、三ロ、モボモガの華やかな風景があり、立川でも「むやみに発展するカフェー街」という記事があります。「エロサービス御法度」とタイトルにあるように、エロサービスがはやっているようです。他の資料によると、カフェはコーヒーを飲ませるだけでなく、「おさわり一回五〇銭」とか、ズロースを穿いたり穿かなかったりとかというのが流行っていたようです。警察の方では、そういうのを何とか取り締まろうという記事です。

「いよいよ人間投げ売り時代」から満州事変へ

しかしその背後で、恐慌が非常に暗い影を投げかけている。この記事もこの近くの三多摩の状況

ですが、先生の給料が出せない。北多摩郡の市町村でも税金が払えないという記事が出てきます。税金が集まらないと町営の小学校の先生たちの給料も払えません。子どもたちの間では「欠食児童」が問題になりました。当時は給食がなかったので、子どもたちはお弁当をもっていく。ところがお弁当を持って行くには普通のごはんでないといけないのですが、お米も買えずに水みたいな雑炊しかうちでは食べていない。それではお弁当箱に詰められない。結局学校にお弁当を持たないで来て、お昼になると校庭に出て、水だけこっそり飲んでいるというような子どもが「欠食児童」です。

これは長野の記事ですが、「いよいよ人間投げ売り時代」ということで、長野というのは岡谷とか製糸業が非常に盛んでした。ところがさっき申し上げた一九二九年の世界恐慌でアメリカが大不況に陥ります。製糸というのは絹糸の生産ですが、その最大の輸出先は第一次世界大戦で好景気にわくアメリカだったのです。アメリカ女性のスカートが二〇年代になってだんだん短くなり、脚を見せるようになりましたから、絹のストッキングをはいて脚をきれいに見せたいということで、アメリカ輸出向けの非常に細い絹糸を日本の女性たちの器用な指先で作って、それを横浜港から積み出していたわけです。そのアメリカが不況になって、絹の靴下どころではない。そういう贅沢品は一番に自粛されます。八王子もそうですよね、八王子は製糸の集産地で、そこから横浜港に運んだものの船に乗せられず、港に野ざらしで積んであったそうです。

そういう状況の中で、当然製糸会社は女工さんの首切りをやる。首切られた女工さんたちはどうするか。当時の女性たちは教育制度も含めて、全部経済的自立のできないようになっていますから、結局女性の仕事としては、女給、女工、女郎、差別用語ですけど、そういう仕事しかない。「紡績女

昭和五年十月八日

信濃毎日

愈よ人間投賣り時代

嬌笑の女の群れを

一ト抱へづゝ廉賣

海の越後に賣り飛す

長野

八月

1930.10.8 信濃毎日新聞

1930年(昭和5)10月8日信濃毎日新聞

工が人間ならば、電信柱に花が咲く」と、女工は人間ではないような差別があるわけですが、その女工も首切られたらどうしますか？結局「女郎」です。当時の信濃毎日新聞には、「愈々人間投売り時代」「一抱えずつ廉売」なんて、まるで女性たちを傷んだみかんみたいに、一盛りいくらみたいな書き方をする。もちろん書いたのは男の新聞記者ですが、そういう実態があったわけです。だからエロ・グロ・ナンセンスで都会は浮かれていますが、そのエロサービスで働く女性たちというのは、結局こういう所でどうにも食えなくて、仕様がなくて売られた女性たちということなのです。

そういう状況の中で、満州事変が起きます。「日支兵衝突、激戦」とこれは大阪朝日新聞の号外で、記事を読むと中国軍が満鉄線を爆破し、日本軍を攻撃したのでしかたなく応戦、戦争になったと書いてあります。これは真っ赤な嘘ですが、それが国民に受け入れられる。中国けしからん、やっちまえという空気がわーと出てくる。女性たちも一生懸命協力するわけです。

これは『主婦之友』といって一九一七年創刊の大衆的主婦雑誌の広告ですが、さっそく「満州の軍人さんに防寒着を贈りましょう」と読者に呼びかけています。寒いところで戦ってくださるというので、「寒い満州でお国のために、命を捧げて尽くしてくださる軍人さん方を温かい心で慰めるために、自分で作った防寒着を送りましょう」と、雑誌社が慰問袋を募集する。『主婦之友』という雑誌は戦争に対してはものすごく協力的です。その結果、戦後、社長の石川武美（いしかわたけよし）は戦争責任を問われて公職追放されます。またすぐ戻りますが、それぐらい協力した雑誌なのです。

一般の女性たち、八王子や立川の女性たちも協力しています。この記事によれば、立川からも二人、満州事変に出征したらしいのですが、その人たちに対して慰問袋を送ろうと呼びかけています。それに対して両勇士から「華々しい戦いができそうです」というお礼状が来たとか、慰問袋に女性が血書、つまり自分の指を切って血を出して、それで手紙を書いて入れたという記事もあります。当時の新聞には、女性は戦争に行けませんから、自分たちも戦争に行かせてください、看護婦さんとして連れていってくださいといった血書が届いたという記事がよく載っています。これも立川ですが、一九三三年二月二一日の記事の見出しに「血書に踊る憂国の女文字」とあります。立川の女性たちは血書が好きなんでしょうか。血書というのは、非常に思いを込めている、必死になっているということをそれ自体があらわしています。

また「東京音頭廃止」という記事もあります。東京音頭がつくられたのが一九三二年です。この年東京は、まだ都ではなくて東京市ですが、周りを編入して、現在は二三区ですが三五区の大東京になるのです。それを記念して東京音頭がつくられ、踊り狂ったといわれています。それに対して、

北多摩郡、谷保の女子青年団では浮かれ踊るのは辞めましょうと東京音頭排撃を決めたということです。戦争のために自粛しましょうというまじめな女性たちの動きです。

肉弾三勇士事件でフィーバーする戦争気分

戦争ムードをさらにフィーバーさせたのが肉弾（爆弾）三勇士事件です。事件そのものは三人の兵士の無惨な爆死事件ですが、これが美談として大フィーバーする。満州事変が三一年九月に開始され、その四カ月後、三二年一月に第一次上海事変が起こります。上海で布教していた日蓮宗のお坊さんが中国人に殺されたのを口実に攻撃するわけですが、これも日本の謀略です。なぜ日本がそんなことをしたかというと、満州国という日本の傀儡国家をつくる裏工作が進んでいましたが、それを知られると国際的な非難を浴びるので、その目くらましのために上海という国際都市で軍事行動をおこしたのです。

しかし中国側は頑強な抵抗をする。二月二二日、上海で廟行鎮（びょうこうちん）という中国の陣地を攻撃するのですが、攻めても攻めてもうまくいかない。ダイナマイトを仕掛けて陣地のまわりの鉄条網を爆破しようとするのですが、撃たれてどうにもならない。そこであらかじめ点火したダイナマイトを抱えて三人の兵士を突っ込ませたわけです。当然爆発とともに身体は吹っ飛ぶ。だから肉弾と言ったのですが、当時の新聞記事を見ると木の上に肉片がぶら下がっていたとか書いてあります。そういう無惨な三人の兵士の死を、メディアが寄ってたかって美談に仕立て上げるわけです。『帝国万歳』と叫んで、わが身は木葉微塵、三工兵点火せる爆弾を抱き、鉄条網へ躍り込む」

とかいろんな新聞がばーっと書きます。これは戦後朝日新聞が、それを反省して「特ダネ競い美談づくりをした」と言う記事です。

それは新聞に限りません。事件があったのは二月二二日で、最初の報道が二四日付けですが、これは歌舞伎座の広告です。六日初日と書いてありますが、三月六日の公演なのです。三月三日に「肉弾三勇士」という映画も公開されています。二月二四日から一週間やそこらで映画化できるものか、きっとものすごくいい加減な映画だと思います。この歌舞伎座の広告だって、「世界比あるやこの気迫、見よ！大和魂の精華」とあってすごいですね。役者もすごいですよ。市村羽左衛門、尾上菊五郎なんて超一流の役者が出演しています。さらに新聞社による「肉弾三勇士の歌」懸賞募集です。一等五百円とありますが、五百円というと当時はすごいですよ。不況の中でだいたい四〇円あれば、一家五人が暮らせるという時に。五百円は、今で言うとどのくらいでしょう、何百万円でしょうね。みんな失業して困っているのに、これは朝日と毎日新聞が競ってやっているのですが、与謝野鉄幹（与謝野晶子の夫）がつくった歌詞が一等賞になっています。与謝野晶子は日露戦争の時、「君死に給うことなかれ」という戦争批判の詩を書いていてわたしは尊敬しているのですが、その与謝野さんがこの段階では三勇士を讃える歌を作っています。「破壊筒をば抱きながら　鉄条網にわしり寄り　投ぐる心に通へかし…」と。時代の空気はそんなふうに変わってきているということです。

若桑みどりさんという、五、六年前に亡くなられた美術史家がいらっしゃいます。『戦争がつくる女性像』など非常に貴重なお仕事をされていて、私がいた大学で記念シンポにお呼びしました。「あなたは戦争を知っていますか」というタイトルでお話をなさって、非常に貴重な映像とか画像をみ

巷間にあふれる「肉弾三勇士」もの↑

「主婦之友」昭和6年12月号

せてくださったんですね。その中でも彼女が力を入れて話したのが、肉弾三勇士事件です。若桑さんのお話によると、新聞、映画やお芝居だけではなくて、子どもの着物の柄、それから端午の節句の人形にも爆弾三勇士が使われているのです。三人の兵士が爆弾を抱えて死ぬ絵柄の着物を子どもに着せる親の神経、わたしにはわかりません。何を考えているのかと思ってしまいます。勇壮な、お国のための死というところだけが受け入れられるのでしょうか。それを着物の柄にして売りだす商魂たくましい織物屋がいて、デパートで売られ、買って着せる親がいてということです。若桑さんのお話を聴くだけではもったいないということで講演の内容をブックレットにしましたが、そこに写真が載っています。

暗い不況とけたたましいエログロ文化という両極端の世相の中で、不安の気流の中を漂う人びとにとって、肉弾三勇士事件は鮮烈な一服の清涼剤のようなものとして受け止められたのではないか。若桑さんと意気投合したのですが、戦争というのは白黒がはっきりしているのです。決められない政治の反対で、戦争は勝つか負けるかです。サッカーだってどうしてみんな喜ぶのかと言えば、勝つか負けるかがはっきりしているからです。サッカーは人が死なないからいいけど、戦争はそこがもっとはっきりしている。生か死か、勝つか負けるか。鬱屈した状況の中ではそうした白黒はっきりしたものが好まれます。もちろんそれが自分の身に降りかかってきたり、自分の家族に降りかかってきたりしたら大変でしょうけど、メディアで流布されている限りは、わぁーやったやったという感じで受け止めてしまう。そういう中で戦争気分が蔓延していくのです。

「国防婦人会」発展の影に軍の支援

そういう中で女性の戦争協力が始まります。中でも戦時体制に大きな役割を果たしたのが国防婦人会です。その成立のきっかけがまた血みどろな話なのです。この新聞記事、これは大阪の新聞に掲載された小さい記事ですが、「出征する中尉に若妻が死の贈物、正装して自殺を遂ぐ」とあります。一九三一年一二月。九月に満州事変が始まって、大阪第四師団第三七連隊所属の井上清一中尉が満州に出征することになったわけです。そしていよいよ明日は出征するという一二月一二日、うちに帰ってみたら若妻、千代子さんが待っているはずなのに、家に鍵がかかっていて入れない、どうしたんだろうと思って無理やり戸を開けて中に入ってみたら、奥の座敷で妻が懐剣で喉を突いて亡くなっていたのです。傍らには「ご主人様」と書かれた遺書がありました。

『家の光』という農村向け大衆雑誌三二年七月号の絵物語によれば、「出征を励ます覚悟の自殺」ということで、遺書には「ご主人様、私はうれしくてうれしくて今命を絶ちます。後のことは何一つご心配ございますな」ということが書かれてあったと。つまり若妻が一人あとに残されると、夫は妻に心を残して、後ろ髪を引かれるという言葉がありますが、戦争で十分な働きができない。そうなると申し訳ないのでいま命を絶つ、というわけです。それを「後顧の憂いを絶つ」と言います。後顧というのは後ろを振り返る。戦争で「突撃！」と言われても、「ちょっと妻が…」と後ろを気にしているようでは勇敢に戦えない。あらかじめ妻が死ぬことによって、夫が何の憂いもなく戦えるようにしようという、それが「後顧の憂いを絶つ」です。とんでもないことですよね。

この事件が国防婦人会創立につながっていくのです。国防婦人会の創立者は安田セイさんという

人ですが、安田セイさんが国防婦人会を創立したきっかけは何だったのか。私はそれが気になって、大阪に何度も足を運びました。そして安田さんのお宅を捜して訪ねて行きました。安田セイさんは一九五二年に亡くなっていたのですが、お嬢さんの喜代子さんがご健在で、お話を聞けました。せいさんは自害した井上千代子さんの夫の清一さんと親しい関係にあって、千代子さん自害の当日、井上家から使いが来て「すぐ来てほしい」というので、当時小学校一年生だった喜代子さんを連れて行ったそうです。

出征する中尉に
若妻が死の贈物
盛装して自殺を遂ぐ

上：大日本国防婦人会発会式

井上千代子の自害を報じる当時の新聞

その時はもうお布団に寝かせて白い布がかけてあったそうですけど、喜代子さんの話で今思い出しても背筋が寒くなることがあります。一二月一二日というと冬で寒いですし、当時は暖房なんてありません。火鉢ぐらいしかない。その部屋にお母さんと一緒に行ったときに、足袋の裏から冷たいものがじわっとしみてきたというのですね。つまり、頸動脈を切っていますからものすごい血が出て、それを畳がどっぷり吸っている。一応表面は拭いているのですけれど、畳が血を吸っていて歩いたら足の裏から血の冷たさがじわっと来たと言うのです。

安田セイさんはそういう生々しい体験をして、その時の帰りは口も利かなかったそうです。他の

史料を突き合わせると、この事件から安田セイさんは大きな衝撃を受けた。そして、これまで女は家の中にいて、夫や子どもに尽くしていればいいと言われてきたけれども、これからはそれではだめなんだと、女といえどもお国のために命をかけなければいけないんだと強く心に刻んだというのです。でも安田さんはランプの傘を作る零細工場のおかみさんということで、一人の力ではそういう国家的な会を作るのはむずかしい。そこに警察とか軍とか、マスコミが協力するのです。

安田さんが住んでいたのは大阪の港区です。安田さんは井上千代子さん自害事件をきっかけに、何かお国のために働きたいと思っていたわけですが、その時に例の上海事変がおこって国内から兵隊が次々と送り出されていく、大阪港からも送り出されていく。そういう状況の中で、安田セイさんは、満州へ行ったら生きて帰れるかどうかもわからない兵隊さんたちのために、せめて熱いお茶の一杯でも飲んでもらおうじゃありませんかと近所の主婦を語らって、ボランティア活動を始めたわけです。それを警察とか憲兵とかが見ていて、「うん、これは使える」と。肉弾三勇士事件が起きたのが二月の終わりですが、三月一八日に大阪国防婦人会という形で旗揚げすることになります。その段階では大阪の港区の一角で、私は発会式の写真を見せていただきましたけど、制服の白い割烹着をつけた女性五十人ぐらいが神社の前で並んでいました。それが一〇月には東京に進出して、陸海軍省後援の下に大日本国防婦人会となって全国展開をしていくのです。

とくに三七年の日中全面戦争が始まってからは、国防婦人会は「燎原の火のように」全国に広がってゆきます。そして兵隊さんの出征、帰還、遺骨が戻るたびに白い割烹着の女性軍団が出動するようになります。割烹着というのはおふくろ、おっかさんというイメージがあって、男の人はとて

も好きだったりしますが、結局、割烹着とおふくろというイメージがくっつくのは国防婦人会の活動がきっかけです。国防婦人会は「宣言六か条」をだしていますが、そのなかに「母や姉妹と同様の心をもって、軍人さんのために働きましょう」とあって、非常に事細かに支援のあり方が指示されています。

国防婦人会の会員は庶民層が中心で、主婦だけでなく、紡績工場や遊郭などの女性たちも組織しています。だから急速に会員が増えていきます。同じような女性の軍事援護団体として愛国婦人会がありました。これは一九〇一年、日露戦争の前にできているんです。こちらはエリートの奥様たちです。私は一度立川で間違えて行って、怒られたことがあります。私は国防婦人会のことを調べていて、「あそこのおばあちゃん、確かむかし国防婦人会で活躍していたそうだよ」というのでお訪ねして、「昔、国防婦人会の分会長をなさっていたそうですが」と切り出したとたん、「違います」と怒りだされたんです。「国防なんかではありません。私は愛国ざーます」というわけ。愛国婦人会の会員であるということは一種のステータスシンボルなんです。「良家の奥さま」という風にそれだけでなったそうです。大阪で愛国婦人会の方に聞き取りしたときも、「国防のお方はそこら辺のおかみさんですから」と非常に差別的ないいかたをされました。愛国婦人会の方はいい着物を着てしゃなりしゃなり、お金はたっぷり出すという、金出し団体と言われていました。

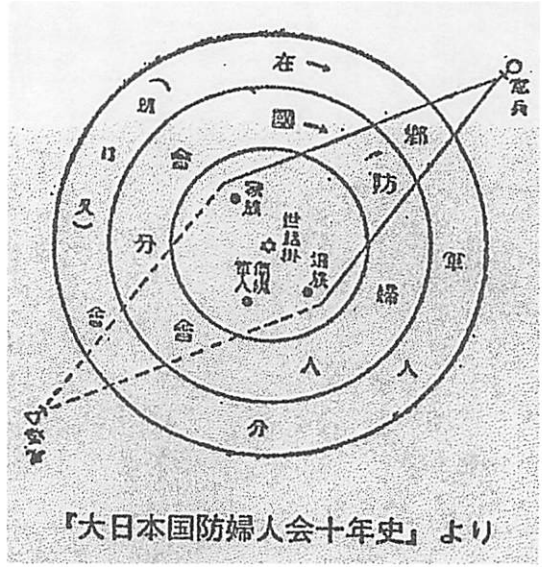
それに対して国防婦人会は、金はないけど「心と身体で」と活発な活動を展開しました。だから大衆的な紡績女工とか遊郭とか、今まで人間扱いされないような女性たちまでも巻き込んでいくの

です。大阪の天下茶屋（てんがじゃや）で聴き取りしたとき面白い話がありました。天下茶屋は当時別荘地でいいとこの御寮人さんが住んでいたのですが、そのすぐ近くにドヤ街の釜ヶ崎とか飛田新地がある。そこが国防婦人会の同じ分会になったのです。今まではいいとこの御寮人さんと遊郭の女性が同席するなんてあり得なかったのですが、一緒の分会として御堂筋を行進したりするわけです。奥さんたちは、女中が着るような割烹着を着せられて、「もう恥ずかしいわ」と意気が上がらない。それに引き換え遊郭の女性たちは、春の踊りとかで集団的な行動をしていますから、天下茶屋の奥さんが「本当にきれいでしたよ」と言うんですね。姉さん芸者は黒と白の鼻緒、半玉さんたちは赤と白の鼻緒の草履をはいて、それが行進するとしゃしゃしゃとそろって見事だったと。それに引きかえ御寮人さんたちは、集団行動なんかしたことがないものだからデレデレしていて、最後に軍人が講評をした時に遊郭の女性たちは褒められ、奥さんたちはダメだと言われたそうです。

国防婦人会は底辺の抑圧されていた人たちにとって、一種の平等と解放をもたらすようなものとして機能したといえるでしょう。もちろんそれは幻想ですが。軍隊もそういうと

ころがあります。軍隊に入ると、金持ちの坊ちゃんでエリート大学出身者が水呑百姓出身の下士官に殴られたり、逆に田舎で食べるに食べられなかった人たちが、初めてライスカレーというものを食べて、こんなおいしいものが世の中にあるかとびっくりしたとか、軍隊に入って初めて暖かい毛の軍服を着たとか、そういう話はたくさんあります。だからいじめられたエリートの側からすれば、軍隊とは抑圧的で暴力的な非人間的組織ですが、殴った貧農出身者からすれば軍隊は天国となります。国防婦人会はその女性版として機能した部分もあったのではないかと思います。

国防婦人会は四一年一二月にアジア太平洋戦争が始まった直後、四二年二月に解散しているのですが、それでなくなったわけではなくて、愛国婦人会、大日本連合婦人会とともに大日本婦人会に「発展的解消」をします。国防婦人会は上部団体が陸海軍省、愛国婦人会は内務省、大日本連合婦人会は文部省ということですが、いわゆる縦割り行政の弊害で相互の連絡が良くない。また愛国婦人会も日中戦争開戦以後は見送り活動などもするようになったので、しょっちゅうバッティングするわけです。そして市町村レベルでは、各婦人会のトップは町長夫人などがなることが多いのでかけもちです。愛国婦人会の会長さんもやり国防婦人会の会長さんもやりで、帰ってきたら襷を付け替えてまた出かけて行くということで、忙しくてかなわないと悲鳴が上がっています。それで結局一本化しましょうということで「大日本婦人会」になったわけです。その時に国防婦人会は会員数一千万近くです。三二年に発足して十年足らずで、一千万まで急成長したのは非常に珍しい。それにはもちろん軍の支持があったことが大きい。



『大日本国防婦人会十年史』より

では、なぜ軍は国防婦人会に肩入れしたのか。図を見ていただきたいのですが、三重の円の真ん中にいるのは家族・遺族・傷痍軍人です。家族というのは今、夫や父が出征している留守家族です。遺族は戦死者の家族、そして傷痍軍人は戦争で傷ついた人。つまり真ん中にいるのは戦争で直接被害を受けた人たちです。その次の円が国防婦人会、その外側に在郷軍人会、右端に憲兵、左に警官となります。どういうことをあらわしているかというと、真ん中にいる出征家族や遺族や傷痍軍人は戦争の被害を直接受けていますから、当然戦争に対して批判的な思いを持っていることが多い。でもそれをぺらぺらしゃべって、「だから戦争は嫌だ」「うちの父ちゃん死んじゃった」みたいなことを言い出されたらたいへんです。場合によっては戦争の継続はできなくなります。ということで、まずは国防婦人会の女性たちに取り巻かせて、さっき「母や姉や妹の心でお世話しましょう」という宣言を紹介しましたが、「お彼岸には手作りのおはぎを持って行ってあげましょう」みたいなことが本当に丁寧に書いてあ

ります。そういう風にして、戦争で被害を受けた人たちを真綿でくるんで口をふさがせる。その外側を在郷軍人会の男たちが取り巻き、両端で憲兵と警官がにらみを利かせているということです。

つまりまずは戦争の犠牲者たちの恨みの声を抑え込む役割をさせられたということです。それを女性たちが善意で一生懸命やったわけです。それが戦争継続につながったことを思うと、女性たちの善意自体が悲しい気がします。しかし国防婦人会を女性解放だと当時みているフェミニストたちがいました。市川房枝さんというのは、女性参政権を中心に非常に頑張った方ですけれども、愛知県の農村出身で、たまたま日中戦争が始まった直後に故郷に帰ったら、ちょうど故郷の村で国防婦人会の発会式が行われるというので、市川房枝さんは東京で活動している有名人なので、「挨拶してください」ということで、しゃべることになるのですが、その時の感想です。

『エプロンに襷、少しはきれいに見えるかなも』とお互いに言い合っている。みんな恥ずかしそうだがうれしそうでもある。国防婦人会については言うべきことは多々あるが、かつて自分の時間というものを持ったことのない農村の大衆婦人が半日、家から解放されて講演を聞くことだけでも、これは婦人解放である」。

ここから市川房枝さんは戦争協力にぐっと傾斜していきます。それから平塚らいてうさん、この方もフェミニズムの大先輩ですが、『文藝春秋』という雑誌の座談会で国防婦人会について、「家庭と社会、国家の緊密な関係が分かったりして、新しい目で自分の家庭を見直すようになり、いままでの利己主義から抜け出るようになるでしょう」と評価しています。当時フェミニストの最先端の人たちが、こういう形で国防婦人会を評価しているわけです。

七月七日はサイパン玉砕から七〇周年の追悼記念日

さて、そういうかたちの女性の戦争協力のもと、日本は戦争を拡大してゆきます。三七年から日中全面戦争になって、あの広大な中国を相手に、勝った、勝ったと提灯行列をしたりしますが、中国の戦略は「勝たないけど、負けない」ということなんですね。「広大な大地をもって戦力と為す」というわけで、結局日本は攻め込んで攻め込んで、どんどん内陸に連れ込まれていって、泥沼の長期戦になっていく。それを打開しようとして始めたのがアジア太平洋戦争です。ここからは一気に敗戦に向かっていきます。

話が飛びますが、明日が七〇周年なので、みなさんにぜひ記憶に刻んでいただきたいことがあります。サイパン島というのはご存じかどうか。本当に美しいサンゴ礁の島で、ダイビングやなんかで日本の若者が大勢押しかけていました。私は今年二回ここに行ったのですが、日本人はあまりいなくて、中国人と韓国人、圧倒的に中国の若者です。ハネムーンにハワイはちょっと遠いけど、サイパンなら行けるという中国人カップルがいっぱい、楽しそうにしていましたが、実はここはかつては日本の領土でした。ちょうど一〇〇年前の第一次世界大戦で日本は勝ち組になり、ドイツは負け組になりました。サイパンという島はドイツ領だったのですが、ドイツが負けたんで日本が取り上げたわけです。一九一四年以来、日本の領土として日本人が移住していった。そこで盛んだったのは製糖業、つまりお砂糖を作る産業。そのためにサトウキビ栽培の技術を持っている沖縄の人たちがどんどん導入されました。

一九四四年、アジア太平洋戦争も末期の六月、米軍はサイパンにものすごい攻撃をしかけました。鉄の嵐ですよね、伊豆大島の二倍ぐらいの小さな島に、人口六万人ぐらいが兵隊を含めて住んでいたわけですが、そこに米軍が何倍もの兵力で押し寄せ、艦砲射撃、迫撃砲弾、空襲ともう徹底的でした。七〇年前の七月七日は、日本軍が最後に「総攻撃」をかけた日です。「総攻撃」というのは玉砕のための自殺攻撃です。そこで投降してどうして生きのびなかったかと痛ましくてなりませんが、「生きて虜囚の辱めを受けず」、「敵の捕虜になるよりは死ね」という教育が徹底していますから、武器もないのに死ぬために突撃をする。しかもそこに住んでいた民間人もいっしょに死んでいます。日本軍は民間人にまで、捕虜になるより死ねという。ただ今回、沖縄慰霊団の人たちといっしょにサイパンに行ったのですが、その人たちはからくも生き残った人たちです。当時の状況を伺ったのですけれども、「生きて虜囚の辱めを受けず」というよりはとにかく捕虜になったら、女はレイプされまくり、男は戦車で轢き殺される、股割きされるというものすごい恐怖を叩き込まれていて、そんな思いをするよりはひと思いに死んだ方がよいと思ったということでした。だから米軍に殺されるよりはと、親が子どもを殺しているのです。

これは藤田嗣治という画家の「サイパン島同胞臣節を全うす」という絵です。藤田は「世界の藤田」と言われ、その「乳白色の肌」がほめたたえられています。確かにいい絵で、「猫と女」なんて私は好きなのですが、戦争中パリから戻ってきて、ものすごく戦争画を描いて軍に協力します。さっきお回しした若桑みどりさんのブックレットの中にありますが、講演のあと会場から「なんで藤田は戦争画を描いたのか」という質問が出て、それに若桑さんが答えています。美術史家ですから

詳しくて、藤田は家に日本刀を飾っているようなすごい日本精神の人だったといいます。

この絵はサイパンの民間人の「最後の自決の姿」を描いているのですが、圧倒的に女性なんです。男は左端に銃を構えている男が一人、右にも銃を口にくわえて今まさに足で引金を引こうとしている男性が描かれていますが、女性が圧倒的に多い。サイパンにはスーサイドクリフ、自殺岬と言われている岬とバンザイクリフの両方あって、そのスーサイドクリフからまさに飛び降りている姿とか、黒髪を梳って従容として死についている女性が描かれています。というのは当時新聞報道で、日本軍が玉砕する時には女も子どももともに死ぬんだ、死ぬ間際には日本女性は黒髪を梳って身だしなみを整え、従容として死につくという「美談」が流布されていたのです。それを藤田が絵にしたということです。タイトルの「サイパン島同胞臣節を全うす」の「臣節」というのは天皇陛下の臣下としてモラル、それを全うしたと褒めているのです。自決の美化です。それを縦一・八メートル、横三・六メートルの大きな絵に仕立てたのです。

藤田はこの絵の前に「アッツ玉砕」という絵を描いていますが、これはものすごく迫真の絵で、絵の前にお賽銭箱が置かれて、見る人が絵に手を合わせるぐらい、真に迫った絵だそうです。その後に描いたのがこの絵です。女子供を含めた民間人の自決はこの「サイパン玉砕」が最初で、その翌年に「沖縄玉砕」が起る。そして最後は本土の国民に対して「一億玉砕」が叫ばれた。国民全部、女子供も含めて死にましょうというわけです。

大学の研究会で第二次世界大戦における日本、ドイツ、アメリカ、イギリスについて国際比較をしてきたのですが、女子供にまで一緒に死ねなんて言うのは他の国にはない。ドイツにしてもアメ

リカにしても、戦争では男は女を守るという。そのマッチョイズム自体問題ですけども、女子供にいっしょに死ねというのは日本の特殊性です。それがどこから来るのかわからないのですが。そういう歴史を刻んでからくも生き残り、日本は敗戦を迎えたわけです。

これは原爆のおかげだというのですね。私は被爆者として、原爆を積んだ飛行機が飛立ったサイパンの隣のテニアン島に行くために、サイパンに行ったのです。そこでたくさん人が死んでいる、沖縄出身の人がたくさん死んでいる、そしてその翌年には沖縄本島が攻撃され、同じような形で女子供を含めてたくさん死んでいる。サイパン、テニアンでは、占領した米軍が死体の上をきれいに均して飛行場を作り、そこから東京大空襲、八王子大空襲などのB二九が次々と飛立って何万人も殺したわけです。そして四五年八月、原爆を積んだ飛行機が飛び立ち、広島・長崎の人びとをその年だけで二〇万人も死なせた。その一人がわたしの父です。その悲劇の連鎖に絶句する思いです。

いまサイパンにはアメリカのメモリアルパークの中に資料館があるのですが、そこでサイパンの歴史のDVDを上映しています。そこではサイパン戦で日本の抵抗がものすごく強くて、民間人を含めて全部で五万人死んでいる。民間人は一万五千人ぐらい。アメリカも三五〇〇人ぐらい死んでいます。サイパン戦というのはアメリカにとって犠牲が大きかった。それで本土上陸をさけて原爆投下という手段を選んだと原爆を合理化していました。つまりサイパン戦における女性や子供の無惨な死が、広島・長崎の死者たちの原因とされているわけです。そういうかつての日本の歴史が今、きちんと伝えられているのか。忘れられていっているのではないでしょうか。

現在の問題意識から過去に問う時、歴史は初めて姿を見せる

以上お話ししたように、かつての戦争では一九三〇年代の鬱屈した状況のなかで、戦争にうかうか乗せられて行きました。しかしこれは過去のことではない。最近の新しい歴史教科書をつくる会の「自虐史観」批判だとか大阪の橋下維新の会や安倍人気、この間の都知事選で自衛隊の元航空幕僚長が六〇万票も取ったという背景には鬱屈した空気があって、一見革新的だとかスカッとしたことをやってくれそうな、そういうものに惹かれていく。そうした危険な空気がいま結構高まってきているのではないでしょうか。

今日は昔の話をしましたけど、歴史というのは決して昔のことではありません。「歴史というのは現在と過去の対話である」とE・H・カーが『歴史とはなにか』(岩波新書)で言っています。私はすごく好きなのですが。歴史というのはそれ自体としてあるわけではなくて、現在の問題意識から過去に問いかけるとき初めて姿を現す。私としては被爆国日本がなぜ原発大国になってしまったのか、三・一一でフクシマがいまだに終息されないような問題をなぜ引き起こしてしまったのかを、今改めて自分の課題として突きつけられたように思って戦後史の再検証をはじめています。

「二〇二〇三〇」というのをご存知ですか?安倍政権は二〇二〇年までに、女性管理職を三〇%にまで増やすと言っているのですが、戦時中も一般の女性たちには国防婦人会で割烹着着せて世話させたり、軍事工場に動員してむちゃくちゃ働かせたりしましたけど、一握りの女性たちは「婦人国策員」として国家機関に登用するとか活躍させています。市川房枝さんなんかが乗ってしまったのはそのためです。そういうことを考えると「二〇二〇三〇」、女性の活躍政策もしっかり冷めた目

で見ていく必要がある。さもないと安倍の戦争のできる国づくりに女性も協力させられることになりかねない。そして格差社会での鬱屈で、在特会でヘイトスピーチをして憂さ晴らしをしているような状況の背景をきちんと見なくてはならないと思います。

最後に「弱者が弱者のままで尊厳をもって生きられる社会を」というのは上野千鶴子さんが言っている言葉で、私は非常に好きなのです。つまりフェミニズムと言うと、男並みに女が強くなることだ、女が男と同じに頑張ることだという風なイメージがあるのですが、上野さんが言っている「弱者が弱者のままで」というのは、弱者という言い方は問題があるかもしれませんが、男と同じように強くなることで平等になるのではなくて、弱者であろうが、人間としての尊厳をきちんと保障されて生きられる世の中をつくる、それがフェミニズムだというのです。女性だけでなく、障がい者とか民族的なマイノリティとか、社会的弱者とされている人にとってもそうです。そういう人たちが尊厳をもって生きられる世の中を作ることがフェミニズムの目標なんだというわけです。それは戦争否定の思想にもつながると私は思っています。（了）

熱心に加納さんのトークに耳を傾ける参加者

農園便り

ケヤキ農園あれこれ

町田　輝子

私は今年から借りている農園の名称を「ケヤキ農園と」した。この農園は以前勤めていた仕事場の側の畑である。従業員だった二人が借りて野菜をつくっている。

二年ばかり夏野菜、冬野菜と連作である。半分シェアーしている相方とせっせと肥料を施して、土作りに時間と労力をかけている。

農園の持ち主もケヤキの大木があるために、この一画は陽があたらないのでプラムや柚子の果樹を植えているだけである。その果樹に挟まれた農園である。

地主の状況も変化して、子供が就農して世代交代があった。若い人は農作物の栽培方法も違って、野菜の種類も増えてきた、耕作地が不足気味になっていると言われていた。条件の良い畑は出荷用の野菜を作らなければならないので、貸りる畑もこの場所になっている。

「ケヤキ農園」は畑の隅の隅にある。今年は比較的太陽があたる場所になり、あの猛暑にかろうじて耐えていたが早く枯れてしまった。専業の人達も早くに収穫は修了していた、素人の私が早々と終わったのはあたりまえのことである。きゅうりは七月中ごろになっても苗が手に入ったので植えたが、収穫は三本であった、肥料もこまめに施していたのに。瓜も植えたが葉が繁りすぎて小さい実が二個なっただけである。お日さまと肥料では成り立たないのが野菜の栽培である。

今夏の新しい作物は黄色のミニトマトでこれは美味しかった、大当たりのトマトである。お店で見ても結構な値段であった。鼻高々に少しずつ近所に配り自慢していた。少しの個数に価値があったようだ。

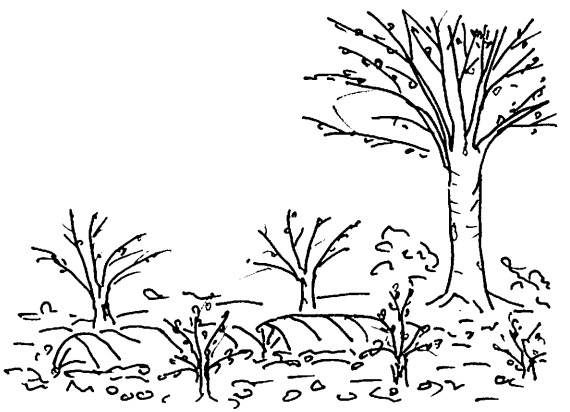
秋になって連作を心配しながら冬野菜の準備をする自分に笑ってしまう。野菜作りを止めようか

なと言いながら、次の予定をしているのだ。いろいろと思い悩み文句を言いつつ、そういうことを楽しんでいる、収穫など二の次である。

十月の初めにホウレンソウの種を蒔いて、月なかばには芽が出てきた。白菜の苗も植えてみた。元気に育っているのをみると、土色のなかに若緑の白菜が目を楽しませてくれる。夏は野菜の花がとりどりに咲いて賑やかであるが、冬は葉野菜ばかりで華やぎがない。

夏の畑は雑草の成長が早いので草取りが大変である。こまめに取らないと、すぐに大きく育ってしまう、草との戦いである。冬は草取りはないが、作物の成長は遅くなり霜と虫除けのためにトンネル栽培である。しかし、厄介物のケヤキの落葉が風に吹き寄せられて、寒さよけになる。良い行いが一つくらいないとケヤキも存在価値がない。

昨年は日当たりが良くなかったので根菜の収穫が悪かった、今回は全て葉物類にした。正月に食べられると良いなと思って野菜達を見守っているこの頃である。



ケヤキ農園も秋から冬に衣替え

あとがき…

▽サラエボ事件（オーストリア・ハンガリー帝国の皇太子夫妻暗殺事件）に端を発した第一次世界大戦から100年目の今年。ロシアのウクライナ介入、パレスチナ地区ガザでのイスラエル軍とイスラム主義組織ハマスとの戦闘。中東地域での「イスラム国」をめぐる攻防などなど、今も止むことなく続く他民族への迫害と殺戮。いま、秘密保護法、集団的自衛権の容認など、戦争への道を着々と歩み始めている日本。この現実とどう向き合って行ったらいいのか、改めて考えさせられている。（吉澤エミ）

▽自分の母校、小学校が閉校になることにびっくりさせられた。他の地域で閉校のニュースが放映されてるのを見る事は（最近、閉校された高校の話題も聴いた！）あったが、わが故郷にも閉校の問題が起きていたとは、ただ驚きであった。「学校は絶対に存在するもの」と私だけでなく誰もが信じていると思う。びっくりサプライズだった。

新しい小学校で学んでいる、子供たちの元気な様子をみると、私はこれも時代の流れの一歩だと考えることにした。（町田輝子）

▽秋元松代は戦争、敗戦の経験から立ち直ろうと三好十郎の戯曲研究会に通いました。三好は戦中の反省と青年たちへの責任を痛感したから研究会を開いたそうです。――戦争がどんなに人びとに打撃を与え、再び繰り返してはならないものとして戦後精神を育てたか。戦争を経験した人は人間が大きく深いと思うことがあります。現在の平和主義は身を切る中から育ってきたのだと思います。（田島すみ子）

▽「知って、感じて、考える…」のフレーズに押されてスタディツアーに加わり、初めて被災地に入りました。原発20㎞圏内に入って見た光景は、あらゆる観点から原発問題を考える原点であると実感しました。原発再稼働をはじめ、集団的自衛権、特定秘密保護法など目前の重要な争点を「アベノミクス柄の風呂敷で巧みに包んで」（朝日新聞）引き出した選挙結果。日本をどこへ導こうとしているのか、恐ろしい。（草場弘子）

▽福島の苦労を実感した旅でした。ツアーを企画した坂口さんから、東電に勤めた友人が早死にした話を聞きました。そこまでして原発は必要でしょうか。今号は「銃後史」研究者、加納実紀代さんの講演記録も載せました。女たちがまた銃後の務めを担わされることがないよう、自覚したいですね。（原和美）

「自由時間」……

なんだかウキウキ、ワクワクしてきます。学生時代、何ら制約のない「自由時間」は最もうれしかった時のひとつ。

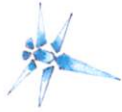
二〇年ほど前から立川の女性たちの聞き書きをしながら、「つむぐ」という冊子を編んできました。養蚕や織りで毎日を紡いでいた祖母たちの暮らし、砂川闘争の中で人間として急成長していった女たちの姿、占領下の女性たちの光と影など、私たちが「縁」を持った立川で女性がどんなふうに歩み、何を感じてきたか、「聞き書き」を通して見つめなおしてきました。二〇〇二年三月に発刊した「つむぐ一〇号―立川の女性たちの近・現代の歩み―」をこれまでの私たちの活動のまとめとし、これからはそれぞれがそれぞれの「自由時間」を楽しく書いていきたいとこの小冊子「自由時間」を創刊いたしました。

日々の暮らしの中で疑問に思っている事、各自の生活の中での思いや紀行文など、皆さまへの「お便り」のように綴っていきたいと思っています。

人生の自由時間、ひと仕事終えた後の自由なひととき――　私たちの「自由時間」にいくばくかの風を感じていただけたらと念じています。

二〇〇三年九月

「つむぐ」の会



つむぐの会
2014 年 12 月 30 日発行（頒価 600 円）